

令和6年度

## 三教研生活科部会夏季研修会

新たな価値を創出し，生活の中に生かす子ども

～子どもの思いや願いの実現をめざし，学び続ける授業～



と き 令和6年8月1日（木）

ところ へきしんギャラクシープラザ

主 催 三河教育研究会生活科部会

後 援 安 城 市 教 育 委 員 会  
三 河 教 育 研 究 会  
公 益 財 団 法 人 愛 知 教 育 文 化 振 興 会



# 1 三教研生活科部会夏季研修会の概要

- (1) 研究主題 新たな価値を創出し、生活の中に生かす子ども  
～子どもの思いや願いの実現をめざし、学び続ける授業～
- (2) 日 時 令和6年8月1日(木) 12時30分～16時30分
- (3) 会 場 へきしんギャラクシープラザ  
(〒446-0041 愛知県安城市桜町17-11 TEL 0566-76-1515)
- (4) 主 催 三河教育研究会生活科部会
- (5) 後 援 安城市教育委員会 三河教育研究会  
公益財団法人愛知教育文化振興会

## (6) 日 程

12:10 12:30 12:50 13:10 13:25 14:55 15:10 16:20 16:30

受付	開会 行事	基調 提案	移動	分科会	移動	講演会	閉会 行事
----	----------	----------	----	-----	----	-----	----------

## (7) 分科会

第1分科会	提案者 单元名	安城市立桜林小学校 仲間とつながりながら学びを深める児童の育成 2年「ぐんぐん育て！ぼく・わたしの野菜！」の実践を通して	教諭 中西 浩平
	提案者 单元名	新城市立八名小学校 人とのかかわりを楽しみ、主体的に学びを進める子どもの育成 ～2年生活科「みんな知っとる？八名のたから」の実践を通して～	教諭 藤原 翔子
	司会者 助言者	豊川市立桜木小学校 愛知教育大学生生活科教育講座	教諭 夏目 直子 教授 加納 誠司 様
第2分科会	提案者 单元名	豊田市立古瀬間小学校 地域の方や上級生、友達と関わりながら、 思いや願いを実現するために粘り強く取り組むことができる子の育成 —1年「日本の遊びに親しもう～昔遊びマスターになろう～」 の実践を通して—	教諭 植田 新子
	提案者 单元名	蒲郡市立形原小学校 友達や身近な人とかかわりながら、自ら追究する子の育成 —1年「見て見て！ぼく・わたしのびゅんびゅんごま ～作って・回して・技をみがいてパワーアップ～」の実践を通して—	教諭 柴田 春菜
	司会者 助言者	豊田市立御作小学校 愛知教育大学生生活科教育講座	教諭 鈴木 美帆 教授 中野 真志 様

第 3 分 科 会	提案者 单元名	豊橋市立花田小学校 虫の飼育活動を通して、友達と関わりながら、 生き物（命）を大切にできる子の育成 ～第1学年「いきものとなかよし」の実践を通して～	教諭	内藤 千佳
	提案者 单元名	西尾市立矢田小学校 年長児との交流を通して、 人と関わることのよさや自分の成長を感じる子の育成 —1年生活科「おいでん わたしたちの みずまつり」の実践を通して—	教諭	杉江 みどり
	司会者 助言者	西尾市立一色東部小学校 愛知教育大学生生活科教育講座	教諭 教授	中嶋 祐子 柿崎 和子 様

### (8) 講演会について

演 題 : 「 好奇心・探究心を引き出す

生活科と総合的な学習の時間の単元づくり・授業づくり 」

講 師 : 文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官  
国立教育政策研究所 教育課程研究センター 教育課程調査官

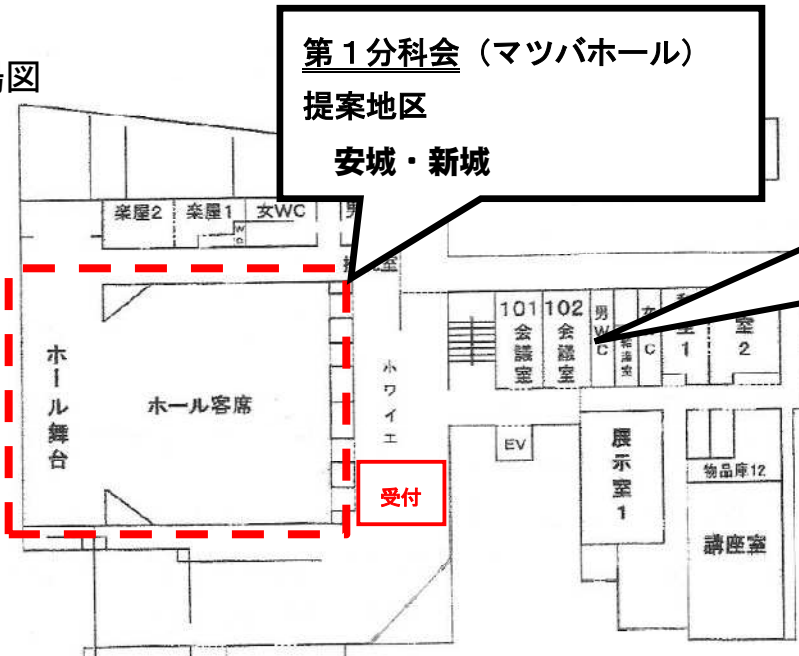
齋 藤 博 伸 先 生

## 2 会場

- ・全体会・・・・・・・・マツバホール（約500席）
- ・受 付・・・・・・・・マツバホール前のエントランスで
- ・第1分科会・・・・・・・・マツバホール
- ・第2分科会・・・・・・・・大会議室（約150名）
- ・第3分科会・・・・・・・・展示室2（約120名）
- ・提案者6名＋補助者3名・各地区夏季研修委員16名・・・・・・・・202会議室
- ・安城市生活科部会委員・・・・・・・・創作活動室
- ・来賓・主催・講師・助言者・顧問校長・・・・・・・・102会議室
- ・接待係・・・・・・・・101会議室
- ・三河地区常任委員8名，事務局3名控室・・・・・・・・講座室

3 会場図

1階



**第1分科会 (マツバホール)**  
提案地区  
**安城・新城**

**控室 (102会議室)**  
講師, 主催, 来賓  
助言者, 顧問校長

**控室 (101会議室)**  
接待係  
**控室 (講座室)**  
常任委員・事務局

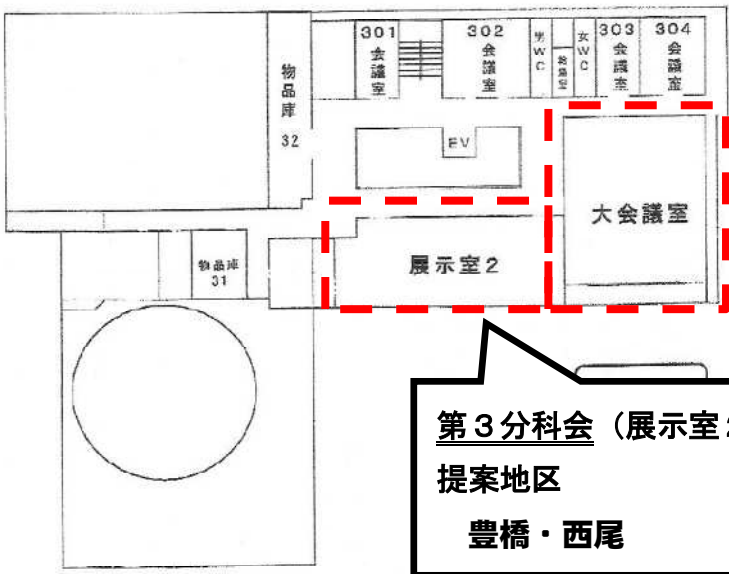
2階



**控室 (202会議室)**  
提案者+補助者  
各地区夏季研修委員

**控室 (創作活動室)**  
安城市生活科部会委員

3階



**第2分科会**  
(大会議室)  
提案地区  
**豊田・蒲郡**

**第3分科会 (展示室2)**  
提案地区  
**豊橋・西尾**

# 新たな価値を創出し、生活の中に生かす子ども

～子どもの思いや願いの実現を目指し、学び続ける授業～

## 【生活科の目標】

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成することを目指す。

## 生活科としての見方・考え方とは

生活科としての『見方・考え方』とは、身近な生活における人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現させていく学習過程の中で、自分自身や自分の生活について考えること。

見方とは・・・

→身近な生活における人々、社会及び自然などの対象と自分がどのようにかかわっているのかという視点。

考え方とは・・・

→自分の生活において思いや願いを実現していくという学習過程の中にある思考であり、自分自身や自分の生活について考えることやそのための方法。

## 三教研が目指す生活科とは～新たな価値を創出し、学び続けるために～

現在の認識から、思いや願いをもち、活動や体験、かかわりを通して気付きの質が高まります。それらが繰り返されることで、様々な気付きが関連づけられていき、新たな価値が創出されます。さらに、学び続けることで、その新たな価値が自分のものとなり、自分の生活をより豊かにしていくと考えます。

思いや願いが芽生える手だて

- 子どもを見取り、生活の中から学びを創る
- 興味関心が高まる教材の内容を吟味する
- 教科等の横断的な視点をもつ
- 幼児教育からの学びや育ちの連続を意識した魅力ある遊びを大切にする
- 子どもを動かす対象との出会いを工夫する

気付きの質を高め、新たな価値を創出する手だて

- 対象とのかかわりを深める活動を繰り返し設定する
- 子どもの心情、子どもの気付きを見取り価値づける
- 今ある自分の思考と友達の思考を往還させるために、聞き合いの場を設ける
- 体験や探究するなかで、自分にとっての最適解を判断する場を設ける
- 対象とかかわってきた自分に向き合うために、振り返りの場を設ける

## 三教研が目指す生活科とは

### 【生活の中に生かす】

『新たな価値』を創出し、学び続けることで、その価値が自分のものとなり、自分の生活をより豊かにしていくこと。



### 【新たな価値の創出】

### 【新たな思いや願いをもつ】

もっと試してみたい・今度は～したい

### 【新たな価値の創出】

### 【新たな価値の創出】

学ぶ前には気付かなかったものの見方や考え方、さらに学ぶ事への喜びに気付くこと。

### 【気づきの質の高まりへ】

- ・自分の気づきと友達の気づきの往還
- ・気づきと気づきの関連
- ・自分の成長を実感する
- ・無自覚を自覚する
- ・気づきや見方・考え方の変容

### 【具体的な体験や活動を通す】

思いや願いの実現に向けて、主体的で豊かな体験から気づきを得る

気づき  
対象に対する一人一人の認識

体験・活動

見付ける・比べる・たとえる  
見通す・試す・工夫する



活動を繰り返す

価値づけ

思考の往還

聞き合いの場

最適解を判断する場

振り返り

### 【活動の楽しさ気づきを表現する】

- ・友達と考えを共有する
- ・自分の考えを見直す
- ・これからの考えにつなげる

表現方法

劇化・動作化・絵・図・言葉



### 【思いや願いをもつ】

子どもが活動を貫く思いや願いをもつことができる対象との出会い  
作りたい・調べたい・助けたい・やってみよう・聞いてみたい

現在の認識

生活から学びを 教材の吟味 横断的な視点 架け橋プログラム 魅力ある遊び

# 第1分科会

【提案者】 安城市立桜林小学校 教諭 中西 浩平

〈提案内容〉

仲間とつながりながら学びを深める児童の育成  
2年「ぐんぐん育て！ぼく・わたしの野菜！」の実践を通して

【提案者】 新城市立八名小学校 教諭 藤原 翔子

〈提案内容〉

人のかかわりを楽しみ、主体的に学びを進める子どもの育成  
～2年生活科「みんな知っとる？八名のたから」の実践を通して～

【司会者】 豊川市立桜木小学校 教諭 夏目 直子

【助言者】 愛知教育大学生生活科教育講座 教授 加納 誠司 様



## 仲間とつながりながら学びを深める子どもの育成

—2年 生活科 「ぐんぐん育て！ぼく・わたしの野菜！」の実践を通して—

安城市立桜林小学校 中西 浩平

### 1 単元について

#### (1) 単元設定の理由

本学級の子どもたちは、自分が思ったことを仲の良い仲間には伝え、楽しそうにコミュニケーションを取る場面が多く見られる。また、生き物や植物に興味や関心をもち、進んで観察することができる。また、ペアやグループ活動の際、仲間と協力しながら取り組むことができる。1年生で行ったアサガオの栽培について振り返ると、「アサガオはきれいに花が咲き、育てることは楽しかった」などと振り返る子どもがいたが、中には、「花がかれた」「世話をすることを忘れた」と振り返った子どもがいた。また、アサガオを含め、家庭で植物を育てた経験はあるものの、自分で食べるものを自分の手で育てるという経験がほとんどなかった。授業の中での話し合いの場面では挙手ができず、自分の考えに自信をもって伝えられない。伝えられたとしても、自分と仲間の考えを比べることが少なく、学びを深められていないと感じる。考えを仲間に伝えられないのは、発言することが恥ずかしかったり、間違えることを恐れていたりするからだと考える。また、仲間の考えや発言に対して関心がもてず、仲間の発言に反応したり、そこから自分の考えを広げようとしたりできない。それは、活動内容に対して興味もてず、自分事として考えられていないためではないかと考える。そこで、子どもには人・もの・ことと出会い、実際に野菜を育てることで、活動内容を把握して自分で考えて工夫し、「話したい、伝えたい、聞いてほしい」という思いをもち、自分の考えに自信をもってほしいと考えた。そして、野菜を育てる中で、仲間と関わり合いながら考えることで、学びを深められるようになってほしいと願う。

本研究では、生活科「やさいとなかよし」の単元を取り上げる。2年生になり、「1年生で育てたアサガオ以外の植物や野菜を育てたい」という声があがった。子どもとのやり取りの中でミニトマトとキュウリが苦手な子どもが多くいた。そこで、ミニトマトとキュウリの2種類の野菜を育てることにした。自分で育てる野菜を自ら買いに行き、野菜の様子に合わせて世話の仕方を工夫して育てる。野菜の生長を記録していき、野菜を育てている中で困り事や悩み事が出てきたときは、本やタブレットで調べたり、野菜名人からアドバイスをもらったりする。また、仲間同士で解決に向けて話し合い、自分の野菜の様子に合った世話をすることができるようにしていく。野菜が育ち収穫時期を迎えると、野菜の収穫を行う。野菜の収穫後、野菜パーティーを開催して野菜の報告会を行う。ただ、野菜を育てるだけでなく、最後まで愛着をもって育てるために、仲間と関わり合い、世話の仕方を工夫しながら育てることができるようにしたい。

#### (2) めざす子どもの姿

研究主題を受けて、本研究で目指す具現化した子どもの姿を以下のようにした。

- ・野菜に対する自分の考えを仲間に伝え、仲間同士の考えを認め合い、仲間と関わり合いながら自信をもって自分の考えを伝えることができる姿
- ・野菜に愛着をもち、自信をもって最後まで世話をしようとする姿
- ・野菜の様子を観察し、野菜の様子に合わせて世話の仕方を工夫することができる姿

### 仮説 1

仲間の野菜と比べながら自分の野菜の生長記録を振り返る場や、疑問に思ったことや困り事、世話の仕方を話し合う機会を設定することで、仲間と関わり合いながら自分の考えと仲間の考えを比較して自分たちにできることを考え、「話したい、伝えたい、聞いてほしい」という思いをもち、自信をもって自分の考えを伝えることができるだろう。

#### 手立て① 野菜の生長記録を振り返る場の設定

野菜の生長を記録したことを基に自分の野菜の様子を学級全体で発表し、振り返る場を設ける。自分の野菜と仲間の野菜の生長や野菜の世話の仕方を比べながら振り返りを行う。発表の際、普段から自分の考えを意欲的に伝えられる子どもから発言する。そうすることにより、自分と仲間の意見が似ていたり、同じ考えがあったりすることで、仲間の様子と比べながら、自信をもって発言することができるようになるだろう。また、学びの足跡を作成して掲示する。学びの足跡に記録された仲間の体験活動からの学びを基に、自分たちにできることを考えることができるだろう。

#### 手立て② ペアやグループで話し合う場の設定

ペアやグループで話し合う場を設定することで、自分の考えを伝えやすい雰囲気を作る。また、話を聞くとときに発言する人の方に体を向け、相づちをして反応するようにし、仲間同士で認め合えるようにすることで、「話したい、伝えたい、聞いてほしい」という思いをもち、自分の考えに自信をもつことができるだろう。

### 仮説 2

野菜の苗を自分で買いに行き、野菜に名前を付ける活動を行うことで、自分の野菜に愛着をもつことができるだろう。また、育った野菜を自分たちで収穫して野菜パーティーを開催して野菜の報告会をする場を設定することで、野菜を育て上げた達成感を味わうことができるだろう。

#### 手立て③ 野菜の苗を自分で買いに行き、野菜に名前を付ける

小学校近くにある花屋に自分のお金を持ち、歩いて野菜の苗を買いに行く。事前にミニトマトかキュウリのどちらを購入するかアンケートを取り自分で決めた野菜を買う。買った苗を自分の鉢に植え替え、自分で野菜に名前を付ける。自分で自分の苗を買い、野菜に名前を付けることによって愛着をもって育てたいという気持ちを高めることができるだろう。

#### 手立て④ 自分たちで野菜を収穫し、各家庭で自分が育てた野菜を使って調理をしたり、学校で野菜パーティーを開催して野菜の報告会をしたりする場を設ける

自分が育てた野菜が収穫時期を迎えたら自分で収穫を行う。収穫した野菜を自分の家に持ち帰るものと学校で行う野菜パーティーに使うものに分ける。家に持ち帰ったものは各家庭で収穫した野菜を使って調理をする。作った料理を写真に撮り、各クラスで野菜の報告会を行う。また、学校でミニトマトとキュウリを一口サイズにして一人一人に分けて、みんなで一緒に食べる。食べた後、自分たちが作った野菜について感想を伝え合う野菜の報告会を行う。野菜の収穫や報告会を行うことで、最後まで野菜を育てることができた達成感を味わうことができるだろう。

### 仮説3

野菜日記と生長の記録を付け、困ったり悩んだりしたときには、本やタブレットで調べたり、仲間や野菜名人に聞いたりする場を設定する。困り事や悩み事を解決していくことで、自分の野菜の様子に合わせた世話の仕方を考え、野菜を大きく育てたいという思いを高めることができるだろう。

#### 手立て⑤ 野菜日記と生長の記録を付ける場を設ける

野菜日記（観察用紙）を用意して自分が育てている野菜のイラストや気づいたことを記入できるようにする。また、苗の長さの記録も行う。週に1・2回記録することにより、野菜の生長を感じられるようにする。野菜の生長を感じられるようにすることで、どうすればもっと大きく、美味しい野菜ができるかを自分で考え、「もっと大きく生長させたい」という思いを高めることができるだろう。

#### 手立て⑥ 困り事や悩み事を本やタブレットで調べたり、野菜名人に聞いたりする場を設ける

野菜を育てている中で、世話の仕方や収穫のタイミングなど困り事や悩み事をワークシートに記入する場を設ける。自分が困ったり、悩んでいたりを具体的に知ること、困り事や悩み事を解決するために調べたり、詳しい人に聞いたりする活動に繋がられるようにし、課題に対して自分事として捉えられるようにする。また、事前にワークシートに記入した困り事や悩み事を本やタブレットで調べたり、仲間に相談したり野菜名人に直接聞いたりする場を設ける。子どもが疑問に思ったことを、自分で調べたり、仲間や野菜名人に直接聞いたりすることで、野菜の育て方についての知識をより増やし、知ったことを基に自分の野菜の様子に合わせて世話の仕方を工夫して行い、野菜をもっと大きく育てたいという思いを高めることができるだろう。

### （4）単元構想【32時間完了】

時	学習活動	教師の手立てと支援
つかむ	<p><b>1年生で育てたアサガオの振り返りをしよう【1】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>鉢を使って育てました。</li><li>大きく育てるためにアサガオに話しかけて水やりをしました。</li></ul> <p><b>育てたい野菜を決めよう【2】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>ミニトマトかキュウリのどっちにしようかな。</li><li>ミニトマトを頑張って育てたいな。</li></ul> <p><b>苗を植える準備をしよう【3～4】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>アサガオとは違うのかな。</li><li>苗を植えるために土を準備しよう。</li></ul> <p><b>野菜の苗を買いに行こう【5～6】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>野菜の苗を買いに行くこと楽しみだな。</li><li>買った野菜を大切に育てよう。</li></ul>	<p>◎愛着をもって、大切に育てたいという意欲を高められるように野菜の苗を自分で買いに行く。</p> <p><b>★こと</b></p> <p><b>野菜の苗</b> <b>苗植え</b></p> <p>◎自分にとって特別なものと、愛着をもって世話ができるように、自分の野菜に名前を付ける。</p> <p><b>★もの</b></p> <p><b>自分で名前を付けた野菜</b></p> <p>◎野菜の生長をいつでも振り返ったり、話し合いの際に提示したりすることができるように、ICT機器（タブレット）で写真を撮る時間を設ける。</p>

つなげる	<p style="text-align: center;"><b>苗を植えよう【7～9】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>大きく育ててね。</li> <li>水をあげよう。</li> </ul>	<p>◎自分の世話の仕方や生長の様子についてまとめた学びの足跡やICT機器(タブレット)を見るように促す。</p> <p>★もの <b>学びの足跡</b> <b>ICT機器(タブレット)</b></p> <p>◎気付いたことや困り感を全体で共有できるように、写真をテレビに映したり、育てている野菜を教室に配置したりして話し合いができる場を設ける。</p> <p>◎自分たちで解決できない問題があるときには、専門的な知識やアドバイスを得られるようにゲストティーチャーを招く。</p> <p>★人 <b>一緒に野菜を育てる仲間</b> <b>野菜名人 農家の人</b></p> <p>◎自分で野菜を育てたことによる達成感や、育てられることができた自分への成長を感じられるように報告会をする場を設ける。★こと <b>報告会</b></p>	
	<p style="text-align: center;"><b>自分の野菜に名前をつけよう【10】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ミニトマトだから、ミニトマくん。</li> <li>キュウリだから、きゅうちゃんにしよう。</li> </ul>		
	<p style="text-align: center;"><b>野菜の世話をしよう【11～26】</b></p> <p style="text-align: center;"><b>野菜の生長の違いを見つけ、世話の仕方を考えよう</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>葉の大きさに違いがありました。</li> <li>水はどのぐらいの量をあげるのがいいのかな。</li> </ul>		
	<p style="text-align: center;"><b>こまっていることはないかな</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>葉が黄色く変色しちゃったよ。</li> <li>脇芽が出てきたからどうすればいいのかな。</li> </ul>		
	<p style="text-align: center;"><b>野菜会議をひらこう</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ミニトマトの実がなかなか大きくならないよ。</li> <li>キュウリの形が少し変になってきたよ。</li> </ul>		
	<p style="text-align: center;"><b>野菜を収穫しよう【27～28】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>仲間や先生、家族に報告したいな。</li> <li>家族と一緒に食べたいな。</li> </ul>		
	<p style="text-align: center;"><b>収穫した野菜の報告会をしよう【29～30】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>真っ赤なミニトマトが収穫できたよ。</li> <li>とても太くて大きなきゅうりができたよ。</li> </ul>		
	<p style="text-align: center;"><b>収穫した野菜を食べてみよう【31～32】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ミニトマトは甘くてすごくおいしかったよ。</li> <li>野菜名人以外に他にどんな名人がいるのかな。</li> </ul>		
	広げる		

## 2 実践経過と考察

### (1) 野菜の苗を自分で買いに行き、野菜に名前を付ける(仮説2 手立て③)



資料1  
野菜の苗を買う

自分が育てる野菜に最後まで愛着をもって育てたいという気持ちを高められるようにするためには、自分が育てる野菜を自分で購入しに行くことが大事だと考えた。事前にミニトマトかキュウリのどちらを購入するかのアンケートを取った。子どもたちは育てたい野菜を決めるにあたって「ミニトマトが好きだからミニトマトを育てたい」「キュウリが苦手だから自分が育てたキュウリを食べて好きになりたい」という理由から決めていた。育てたい野菜が決まったら、小学校近くにある花屋に自分のお金を持ち、歩いて野菜の苗を買いに行く。(資料1) 買った苗を学校に持ち帰り、事前に土だけを入れておいた自分の鉢に入れ替える。(資料2) そして、自分の野菜に名前を付けることにした。野菜にちなんでミニトマトは「トマトマ」、キュウリは「きゅうま」と名付けている子どもがいた。



資料2  
苗を植える

## (2) 野菜日記と生長の記録を付ける場を設ける(仮説3 手立て⑤)

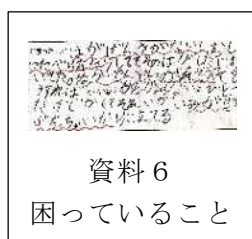
野菜の様子を観察・記録することができるように野菜日記(観察カード)を用意し、自分が育てている野菜のイラストや気づいたことなど、自分の野菜の様子を記入した。(資料3) また、生長記録用紙も用意し、観察時に1m定規を使って苗の長さを測り、自分の野菜の苗の長さの記録も行った。(資料4) 週に1・2回記録することにより、野菜の生長を感じられるようにした。生長を記録していくと「葉の枚数が増えた」などプラスになるような成長記録の内容もあれば、「まったく伸びない」などマイナスになるような生長記録の内容も出てくる。また、「〇cmも伸びた」と、野菜の生長を感じたり、どうすれば

もっと大きく、美味しくなるのかを自分で考えたりして、工夫しながら育てようとする姿が見られた。

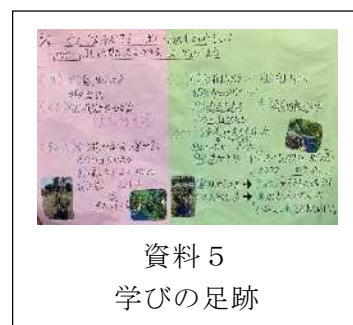
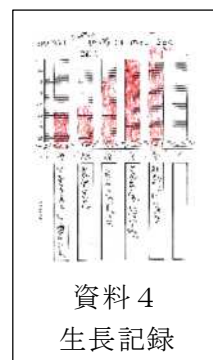
## (3) 野菜の生長記録を振り返る場の設定(仮説1 手立て①)

野菜の生長を記録したことを基に自分の野菜の様子を学級全体で発表し、振り返る場を設けた。ミニトマトとキュウリでは、水をあげる量やタイミング、苗の長さや葉や野菜の大きさが異なる。それぞれのやり方や野菜の様子に違いがあることで、自分の野菜と仲間の野菜の生長を比べたり、野菜の世話の仕方を比べたりしながら振り返りを行った。すると、仲間との野菜の生長の違いがあることに気づく子どもが多くいた。中には、仲間のやり方を真似する子どももいれば、自分なりに工夫する子どももいた。発表する際には、普段から自分の考えを意欲的に伝えられる子どもから発言した。そうすることにより、自分と仲間の意見が似ていたり、同じ考えがあったりして、自信をもって挙手をし、発言することができた。また、たくさんの考えにふれ、「〇〇さんと似ていて」「〇〇さんと少し違って」というようなつなぎ言葉を使って発言することができた。さらに、振り返りを基に、学びの足跡の作成を作成し掲示していった。(資料5) 学びの足跡に記録された仲間の体験活動からの学びを基に、自分たちができることを考え、伝え、活動することができた。

## (4) 困り事や悩み事を本やタブレットで調べたり、野菜名人に聞いたりする場を設ける(仮説3 手立て⑥)



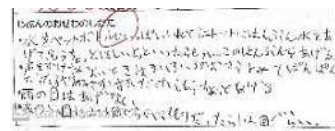
子どもは毎朝水やりを行っているが、その際に自分の野菜の葉に元気がなかったり、虫に食べられていたりして上手く生長しないところに気付いていった。また、野菜が大きく育ってくると世話の仕方が変わってくるため、世話の仕方や「葉に元気がない」「実が全部小さい」など野菜の様子で困っている子どもがいた。(資料6) そこで、野菜日記を記入する際に、困っていることや悩んでいることを記入するようにした。すると、「野菜について調べたい」と子どもから意見が出たため、本やタブレットで調べる時間を設けた。その後、困っていることや悩んでいること



を学級内で共有した。すると、自分の野菜の様子や調べたことを基に「水の量はペットボトル半分ぐらいにしているよ」「つるは支柱に巻くといいよ」とアドバイスをし合う様子が見られた。話し合い後、仲間からのアドバイスを基に野菜の世話をしていくことにすると、一度は上手くいっていたが、更に「野菜が虫に食べられてしまった」「花が咲かない」など、困っていることや悩んでいることが出てきたため、子どもだけで解決していくのは困難となった。そこで、野菜名人に登場してもらい、子どもの困り事や悩み事に対してアドバイスをしてもらうために「野菜会議」を開くことにした。(資料7) アドバイスをする際は1つの答えを伝えるのではなくて様々な方法を伝えてもらうこととし、子どもが自分の野菜の様子に合わせて世話ができるようにした。すると、子どもは「日があまり当たらないところに置いてあるから、日が当たるところに移動しよう」「自分のキュウリはまだ細いから、水の量を多くしよう」と自分の野菜の様子に合わせて世話をするようになった。その後も自分の野菜に合わせて世話をしていき、ぐんぐん野菜が育つ様子があったが、「野菜が大きくなったけどいつ収穫すればいいのかな」「ミニトマトが割れたり、下に落ちちゃったりしたよ」というような新たに悩み事や困り事が出てきた。そこで、学級で仲間の悩み事や困り事を解決するためにもう一度話し合いを行った。話し合いの結果、「大きくなったり、おいしそうになったら収穫していいと思うよ」「水の量は野菜が大きくなってきたらペットボトル半分にしたらどうかな」など、世話の仕方がたくさん出され、どの方法が良いのかが話し合いではまとまらなかった。(資料8) そこで、子どもから「野菜名人に聞きたい」という意見が出たため、困り事や悩み事を解決するため再度野菜名人に登場してもらい、アドバイスしてもらうこととした。(資料9) 水の量は「野菜に話しかけ、土全体が濡れるようにして葉も野菜も元気にしてあげよう」、収穫時期は「ミニトマトは赤くなり落ちそうになったら、キュウリはスーパーに売っている大きさになったら収穫するといいよ」とアドバイスしてもらった。すると、子どもは「明日からは野菜に聞いて、水の量を決めよう」「ミニトマトは優しくポンポンして落ちそうだから収穫しよう」など、野菜名人のアドバイスを基に世話の仕方や収穫時期を理解していた。(資料10) また、収穫後は「野菜名人にアドバイスをもらって上手に収穫できたから、次も大きく育てて収穫しよう」と学級全体に伝えていた。子どもの困り事や悩み事を本やタブレットで調べる活動や野菜名人に登場してもらい話を聞いたり、アドバイスしてもらったりする活動を行うことで野菜の育て方について知識をより増やし、自分の野菜の様子に合わせて工夫しながら世話をすることができる子どもが多かった。



資料7  
野菜名人からの  
アドバイス1



資料8  
世話の仕方



資料9  
野菜名人からの  
アドバイス2



資料10  
振り返り

#### (5) ペアやグループで話し合う場の設定 (仮説1 手立て②)

ペアやグループで話し合う場を設定することで、自分の考えを伝えやすい雰囲気を作



資料 1 1  
自分の意見を  
伝え合う様子

った。ペアでは席の隣同士だけではなく、席の前後などたくさんの仲間と伝え合ってお互いの考えを認め合えるようにした。(資料 1 1) 仲間の話を聞くときには発言する人の方に顔、目、おへそを向けること、また、相づちをして反応するようにし、仲間同士で認め合えるようにした。そうすることにより、ペアやグループで楽しく意欲的に伝え合う子どもの様子が多く見られ、ペアやグループで話し合ったことを全体で共有することができ、少しでも自分の考えに自信をもって「話したい、伝えたい、聞いてほしい」という思いをもつことができ、板書が子どもの意見でいっぱいになるまでとなった。(資料 1 2)



資料 1 2  
話し合いでの板書

### (6) 各家庭で自分が育てた野菜を使って調理をしたり、学校で野菜パーティーを開催して野菜の報告会をしたりする場を設ける(仮説2 手立て④)

自分が育てた野菜が収穫時期を迎えたら自分で収穫を行う。収穫の仕方や収穫時期について事前に本やタブレットを使用して調べ、野菜名人のアドバイスを基に野菜の収穫を行った。自分が育てたミニトマトやキュウリを丁寧に収穫すると満足そうな笑顔が溢れ、仲間に自慢する様子が多く見られた。次に、収穫した野菜を自分の家に持ち帰るものと学校で行う野菜パーティーに使うものに分けた。家に持ち帰ったものは各家庭で収穫した野菜を使って調理をする。家庭の協力もあり、自分で収穫した野菜を使いながら各家庭でアレンジして調理する様子が見られた。作った料理をタブレットで写真に撮り、学級で野菜の報告会第1弾を行った。(資料 1 3) 野菜の報告会では、子どもたちは「自分の野菜はおいしかった」「モッツァレラチーズと絡めたら美味しくてたくさん食べられた」と発表した。また、学校でミニトマトとキュウリを一口サイズにして一人一人に分け、みんなで一緒に食べる野菜パーティーを行った。

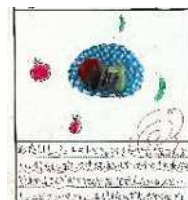


資料 1 3  
野菜報告会

(資料 1 4) 自分が作った野菜だけではなく、友達が作った野菜も食べることで仲間の頑張りを認められるようにした。食べた後、自分たちが作った野菜について感想を伝え合う野菜の報告会第2弾を行った。野菜の報告会を行うと、「苦手な野菜もあったけれど、みんなで育てて一緒に食べたら食べられた」「みんなが頑張って育てた野菜は美味しかった」と振り返った。(資料 1 5)



資料 1 4  
野菜パーティー



資料 1 5  
野菜  
パーティー

## 3 成果と課題

### (1) 成果

#### 1. 仮説1について(手立て①②)

野菜の生長や世話の仕方を発表する際には、普段から自分の考えを意欲的に伝えられる子どもから発言させたことで、自分と仲間の野菜の生長や世話の仕方などを比べ、似たような内容にふれることができ、自分の考えに自信がなかった子どもが堂々と挙手し、自信をもって自分の考えなどを発言できた。また、仲間の方に体を向けて向き合い、相づちをして仲間の考えを認め合うことで、発言の様子から自分の考えに自信をも

って学級全体に伝えることができた。さらに、「〇〇さんと似ていて」「〇〇さんと少し違って」というようなつなぎ言葉を使って仲間同士で意見を繋ぎながら仲間に考えを伝え、学びの足跡を作成し、学びの足跡に記録された仲間の体験活動からの学びを基に自分たちにできることを考えることができた。このことから「話したい、伝えたい、聞いてほしい」という思いをもち、自信をもって考えを伝えることができた。以上より、仮説1の手立ては有効だったと考える。

## 2. 仮説2について（手立て③④）

子ども自らお店に出向いて、自分の野菜を自分で購入したことや名前を付けて育てていくことで、名前を呼びながら世話をしたり、野菜と対話しながら観察したりする姿が見られ、愛着をもって育てたいという思いを高めることができた。また、自分で野菜を収穫することで、「次も収穫できるように頑張るって育てたい」という思いをもち、次に向けての気持ちを高めることができた。さらに、自分や仲間が育てた野菜を使って野菜パーティーを開催したことで、「みんなが育てた野菜は美味しく、苦手な野菜も食べられた」と振り返り、最後まで育て上げた達成感を味わうことができた。以上より、仮説2の手立ては有効であったと考える。

## 3. 仮説3について（手立て⑤⑥）

野菜の生長記録を付けることで、自分の野菜の様子を知ることができた。野菜を育てていく中で出た自分や仲間の困り事や悩み事を本やタブレットで調べることで、自分の野菜の世話の仕方をより理解した。そうすることで、自分の野菜の様子に合わせて工夫しながら世話をする姿が多く見られた。子どもの調べだけでは困り事や悩み事を解決できなかったところで、困り事や悩み事を解決するための話し合いを行ったり、野菜名人にアドバイスをもらったりした。そうすることで、自分の野菜の様子に合わせて土全体が濡れるように水やりをし、優しく触って落ちそうかどうかを判断して収穫を工夫しながら世話をすることもでき、自分の野菜をもっと大きく育てたいという思いを高めることができた。以上より、仮説3の手立ては有効であったと考える。

## （2）課題

今回の実践では一人1種類（学級で2種類）の野菜を育てたが、子どもから色々な野菜を育てたいという声が上がった。野菜によって様々な育て方や生長の仕方があることに気付けるように野菜の種類を増やしてもよかった。野菜名人に登場してもらい、子どもの困り事や悩み事に対してアドバイスをしてもらった時間を設けたが、時間に限りがあるため、事前に子どもの困り事や悩み事を伝えていたが、すべて解決することができなかった。野菜名人にアドバイスをもらう時間をもう少し確保できると良かった。自信をもって生き活きと発言する子どもは増加したが、全員とは言えない。今後も、ペアやグループでの話し合いを行い、教師や仲間同士で認め合っていくことで、「話したい、伝えたい、聞いてほしい」という思いをもつことができるよう努めていきたい。

## （3）研究主題に向けて

自分の思いや願いを実現するために、単元の中で、人・もの・ことと出会うことや、仲間の思いや考えを教師や仲間同士で認め合うことが大切だと考える。粘り強く取り組むことができる子どもの育成を目指し、子どもの実態に沿って単元を構想したり効果的な教師支援を考えたりしていきたいです。



## 第2学年 人とのかかわりを楽しみ、主体的に学びを進める子どもの育成

～ 2年生活科「みんな知っとる？八名のたから」の実践を通して ～

新城市立八名小学校 鈴木 翔子

### 1 単元について

#### (1) 主題設定の理由

30名在籍する本学級は、話すことが好きな児童が多く、朝のスピーチなどの伝え合いの場で、「みんな聞いて！」と自分にかかわる話や興味のある話を教師や友達に伝えることができる。その一方で、話題が自分に関係のないもの、自分に興味のないものになると、相手の話に耳を傾けられずよそや私語が増えてしまう姿もしばしば見受けられた。ペアやグループ活動においても、「できる人が全部やってくれるから」と人任せにしてしまう場面も見られ、双方向的なコミュニケーションが苦手であると感じた。小学校に慣れてきた小学校2年生は、興味関心が自分だけでなく、家族や友達など身近な人へと広がっていく段階であるため、「友達とかかわるって楽しいな」と思える授業をしたいと考えた。

また、本学級の児童は、新しい課題に対して、「すごい！」「やってみたい！」「楽しい！」と素直な反応を見せ、前向きなエネルギーをもって取り組んでいくことができる。しかし、それが自分の思うように進まない飽きてしまったり、早く課題を終わらせたいためかある程度のところで満足してしまったりする姿もあった。教師や周りの人に言われたことだけをやって終わりにするのではなく、常に「なんでだろう？」「もっとやろう！」「自分だったらこうする」などの気持ちをもって、物事に取り組んでいけるとさらによいと感じた。

これらの思いから、「人とのかかわりを楽しみ、主体的に学びを進める子どもの育成」を主題に設定し、2年生活科「みんな知っとる？八名のたから」の単元の実践を通して、研究を進めた。

#### (2) めざす子どもの姿

- ・ 相手の話をよく聞き、進んで人とコミュニケーションをとろうとする子ども
- ・ 自分の思いを大切に、意欲をもち続け主体的に行動のできる子ども

#### (3) 仮説と手立て

【仮説Ⅰ】発言の意欲を掻き立てるような話題やそれを支える話し合いの仕方の支援をすれば、双方向的なコミュニケーションを楽しんで行うのではないかと。

<手立て①>学習発表会やお返しの会など必要性のあるグループでの話し合いの場を設ける

<手立て②>発言段階表を用いて、自分の発言の姿を可視化し、活発な意見交流を取り入れる

【仮説Ⅱ】地域に密着した体験活動を多く取り入れ、児童の「知りたい！伝えたい！」という願いを大切に単元構想を組んでいくことで、主体的で継続的に学んでいくのではないかと。

<手立て③>児童の興味関心が高く、いつでも何度も足を運ぶことのできる地域の施設や店舗を教材にする

<手立て④>学習する中で湧き出た児童の思いを大切に、児童が学びを構築していく

#### (4) 抽出児について

##### (A児の実態)

- ・ 自分の感情や疑問をすぐに口に出すことができる。授業内で、これからA児の興味のある活動を始めるといった場面になると、「よおしやるぞ！」と元気な声で学級を盛り上げてくれる。

- ・話題が自分に関係のないもの、興味のないものになると、うわの空で、相手の話を聞いていないことがよくある。
- ・グループ活動において、いざという時に自分の思いを友達にうまく伝えられない姿がある。
- ・課題に素直に取り組むことができる一方で、「もう少しこうしてみたら？」という教師の助言に「もうこれでいい」と自ら学びを止めてしまう姿がある。

(本単元にかける願い)

- ・相手の話をよく聞いた上で、自分の思いを大切にし、進んで友達とかかわっていく姿を期待したい。

### (5) 単元構想図

#### 「みんな知っとる？八名のたから」単元構想

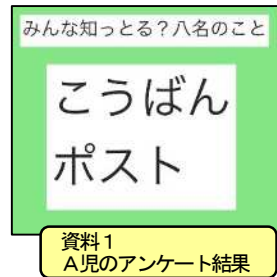
児童の思いや願い	主な学習活動	教師のねらい
町探検楽しみ！ ウォッチンググループなら八名が見える！	第1時 “たから”とは どういうもの？	第1時 ・読み聞かせや宝箱を示すことで、今後の見通しと意欲付けにつなげたい。
やなマルシェとほほえみに行ってみよう！気になる！	第2～4時 ウォッチンググループで 八名を見渡そう！	・学級の“たから”の定義を作成し掲示することで、いつでも立ち返られるようにする。
やなマルシェみたい「はちめい」って読めないように題名にもふりがなを付けよう！	第5～8時 やなマルシェに行こう！	第2時 ・八名地域を見渡すことで、八名にしかなく、休日にも何度も足を運べる施設や店舗の名前を見つけられるだろう。
軽トラ市に行って木の車を見たい！ 五平餅を作りたい！	第9～12時 やなマルシェで 五平餅を作ろう！	第5～8時 ・加藤さんや滝川さんの思いを聞く時間をつくり、八名の人の思いに触れたり、体験活動の機会を設定したりする。
五平餅の歌を完成させたい！ ピザも作りたい！	第13～16時 ほほえみに行こう！	第9～12時 ・五平餅作りを経験することで、ピザ作りも体験したいという声が出るだろう。
どういとお肉を使っている？ カレーの種類はなんで多いの？	第17～20時 ちょっとパンに行こう！	第13～16時 ・すぐに疑問が解決するように、手紙が来たという設定で紹介し、今後の意欲につなげたい。
やなマルシェみたいになんで自分たちの夢を叶えてくれたの？	第21～24時 見つけた八名のたからを 宝箱に入れよう！	第17時～20時 ・すぐに疑問が解決するように、LINEで聞くという設定で紹介すれば、今後の意欲と、やなマルシェとちょっとパンのつながりに自分たちで気づかせたい。
八名の人を思う仲間が つながっていく！ もう知っとる！ 八名のたから	第25～30時 学習発表会で 八名のたからを伝えよう！	第25時～30時 ・町探検で出会った人をまとめることで、さらなる八名の人のつながりに気づくのではないかな。
次はお家の人に伝えたい！	第31～38時 八名の人を 元気に笑顔にしよう！	第31～38時 ・伝える相手を設けることで、何をいちばん伝えるべきか児童同士で活発に考えていこう。
夢を叶えてくれたことを言いたい！ “世界に一つ”は絶対伝えたい！ 八名大好き！八名に生まれてよかった！	みんなのゆめをかなえる会①② みんなのゆめをかなえてくれてありがとうの会	第25時～30時 ・これまでを振り返ることで、次は地域にお返ししたいという思いをもつのではないかな。
うちらもやなマルシェの仲間に入りたい！		
お礼にお花やクリスマスツリーを届けたい！		
フリマをやりたい！ 五平餅のお店を開きたい！		
学校に招待して、感謝する会をやりたい！		

※やなマルシェ…みんなの笑顔のためにと地域の方が運営する八名地域の拠点施設で、多くのイベントを開催している。

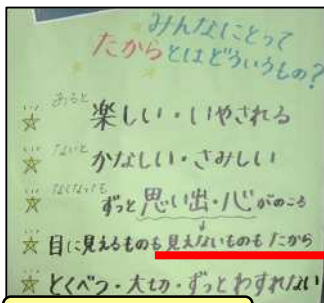
## 2 実践経過と考察

### (1) 町探検への楽しみを膨らませるA児 (第1時)

本単元開始前、児童の地域への関心度をタブレットで調べた。「八名に何かあるか、今知つとること教えて」と提示すると、公民館、神社、床屋などの建物を答えたり、畑、花、果物、生き物などを挙げたりする児童が多かった。すらすらと書いていく児童がいる一方で、全く思いつかない児童も3分の1程度いた。A児は、資料1のように「こうばん」「ポスト」と書いた。この時点では、二か所だけの記載にとどまっていた。最後に、学級全体で調査結果を共有し、教師が「この場所がどんなところか知つとる？」と聞くと、大半が「わかんない」と答え、「早く八名に町探検に行きたい!」と胸を弾ませていた。



第1時では、導入として、「おうさまのたからもの」という本の読み聞かせをした。この本を参考にして、「ずっと思い出が残るから、目に見えないものもたから」など、資料2のような、学級における「たからの定義」を作った。そうすることで、児童が今後「八名のたから」を見つけていく過程でいつでも立ち返られるようにした。その後、「八名のたからって何?」と教師が問うと、児童は口々に「知らない」「出かけん」とわかんない」と答えた。「この勉強でこの宝箱を八名のたからでいっぱいにしよう」と、教師がこの本に出てくる王様と同じ宝箱を資料3のように見せると、「わあ!」と歓声が上がり、A児も「宝箱をいっぱいにするぞ!」と拳を挙げて意気込んでいた。児童の興味を引く教材を用いて、手立て③のように身近な地域をテーマにした導入を行った。これが、本単元への見通しと意欲づけにつながったと考える。



資料2 「たからの定義」

資料2 「たからの定義」



資料3 たからばこを児童に見せる教師

### (2) 自分で八名のたからを見つけに行きたいと言うA児 (第2～4時)

時間割を見たA児は、朝から「どこに行くのかな」とそわそわしていた。第2時、教師が「どこから町探検に行きたい?」と聞くと、よく分からないけれど、とりあえず早く行きたいといった様子であった。「じゃあまずは、八名に何かあるか見に行こう! 学校から八名がよく見える場所ってどこだ?」と言うと、すぐさま「ウォッチングルーム!」という声が返ってきた。ウォッチングルームとは、八名小の屋上にあるガラス張りの部屋で、八名地域を全方位から見渡せる場所である(資料4)。児童は、ウォッチングルームから見たものをどんどんワークシートに書き出していった。山や車、雲が見えたという意見が出てくると、どこにでもあると反応する声が聞こえてきた。「じゃあどこにでもないの



資料4 ウォッチングルームからの観察

教えてよ」と教師が言うと、ウォッチングルームから見た八名にしかないと思うもの(公民館、やなマルシェ、ほほえみなど)を児童が板書した。すると多くの児童が、やなマルシェとほほえみの話題を持ち出し、自分の生活経験をもとに今知っていることを話した。やなマルシェの話では、B児の「子どもは入ってはいけない倉庫がある」という発言に対して、「ほんとかな」と呟くA児の姿があった。話し合いを通じて、児童のやなマルシェとほほえみに行きたいという気持ちが膨

れ上がり、この2つの場所に行くことが決定した。手立て③のように、八名地域を教材とするために、ウォッチングルームから見たものを共有したことで、八名にしかない施設や店舗に自然と学級全体の興味関心が向いていった。これは、手立て④のように、児童の「行ってみたい!」「気になる!」といった思いを一つ一つ拾いながら単元を展開したことで得られた結果であると考える。

### (3) 自分の願いが叶うことに喜びを感じるA児

#### 町探検1：やなマルシェ（八名地域の拠点施設）（第5～8時）

まずは、学校からいちばん近いやなマルシェに出かけた。代表の加藤さん、滝川さんらが協力してくださった。A児は、インタビューの時間で、事前にもっていた五平餅作りやお弁当作りについての疑問が明らかになり、「おお」と反応していた。加藤さんは「せっかくだから」と、第4時で児童が興味をもった倉庫に特別に入らせてくれた。児童は大喜びで倉庫に入り、A児も両手をいっぱい広げ、跳び上がっていた。そこには、月に1回の「しんしろ軽トラ市（のんほいロット）」で使われる木の荷台があった。「この木の車は、宇宙一だよ」「今日の日曜、軽トラ市があるよ」と説明して下さる加藤さんの話に、児童たちは「絶対に軽トラ市に行く!」と大興奮だった。するとA児は、インタビューの続きで挙手し、「やなマルシェは世界に一つですか」と質問した。木の荷台の話で宇宙一という言葉聞いたからか、八名にしかないものかどうか確かめたかったからかは分からないが、A児の質問で、一気に児童の注目が加藤さんの答えに集まった。「世界に一つだよ!やなマルシェはここにしかないよ!」の加藤さんの言葉に、また児童は盛り上がりを見せた。

学校に戻り、やなマルシェでの感想を述べ合った。この時間から手立て②



資料6 発言段階表のレベル内訳

の発言段階表（資料5・6）を取り入れ始めた。感想をどんどん発言し、半分程の児童がすぐにレベル2の「立ってのはつ言する」に到達した。A児は、「いろんなものが売っててすごかった、お預かりには行っていただけ、知らなかったからです」と発言した。お預かりとは、夏休みにやなマルシェの方が、子どもを預かり見守ってくれるという活動で、本学級の5、6人の児



資料5 発言段階表

童が利用している。木の荷台の話では、資料7のD児、E児の「〇〇さんにつなげて…」といった発言、F児のこれまでの友達の発言を受けて自分が考えた発言があり、これは、レベル4「つなげてのはつ言する」やレベル5「あい手の考えにたいして自分のいけんを言う」に挑戦する姿であった。その結果、「やなマルシェで五平餅を作る」という次時の活動につながった。初めて

- I：木の車はなんで見せてくれたのかね?  
 C児：八名小の子が来てくれたからって加藤さんが言っていたよ。  
 D児：Cさんにつなげて、「やなマルシェは、みんなの夢を叶える場所」と言っていました。  
 E児：Dさんにつなげて、「五平餅も作りたいって言えば、作れる」って。  
 F児：みんなで五平餅を作りたいって言えば、叶うかもよ。

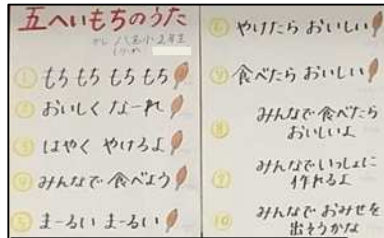
資料7 話し合いの記録

発言段階表を取り入れた授業であったが、手立て②のように児童の発言一つ一つを教師が可視化することで、児童も友達の発言に真剣に耳を傾ける様子があった。

#### 町探検2：やなマルシェでの五平餅作り（第9～12時）

みんなの「五平餅を作りたい!」という願いが届き、やなマルシェで五平餅を作らせてもらえるこ

とになった。加藤さんの「みんなが作りたいて言ってくれたから実現したよ。私言ったもんね。みんなの夢を叶えるって」の声に、A児は笑顔を浮かべた。児童は、地域の方に教えてもらいながら、五平餅作りを楽しんだ。帰り際、加藤さんが再度「ここは、みんなの夢を叶える場所。またいつでも



資料8 みんなで作った五平餅の歌

来てね」と言うのと、「はい、また来ます！」と元よく手を振り返していた。振り返りシートにも、全員が「😊マーク」(楽しかった)に丸を付けていた。これは、手立て④のように児童の「やりたい！」という気持ちを大切にしていたからであると考えた。また、学校に戻ると、「地域の方と作った五平餅の歌を完成させたい！」という声があり、資料8にあるように10番まである「五平餅の歌」が完成した。

### 町探検3：ほほえみ（喫茶店）（第13～16時）

第13・14時では、第2時に児童が行きたいと決めたもう一つの場所、ほほえみを訪問した。A児は、「ほほえみは、世界で一つですか」という質問をした。「世界に一つだよ」というマスターの答えに「おお」「ほほえみも？」と歓声が上がった。ここでも、児童の「奥の広いお部屋を見たい！」「ごはんを作ってるところを見たい！」という声を快く引き受けてくださり、児童は満足げな顔を見せた。(中略)

### 町探検4：ちゃっとパン（石窯パン工房ちゃっと）でのピザ作り（第17～19時）

町探検1・2で、加藤さんから「やなマルシェは、五平餅作りやピザ作りをやっているよ」と聞いた児童は、「ピザを作りたい！」という気持ちが高まっていた。しかし、ピザを作れる場所がちゃっとパンだとわかると、「じゃあ次は、ちゃっとパンに行きたい！」と児童は、さらなる探検場所を提案した。ちゃっとパンを経営する茶谷さんは、八名小の児童のために、ピザを作らせてくれた。A児のグループは、「喧嘩しんように4個に分けよう」というA児の提案で、ピザ作りを楽しんだ(資料9)。(中略)



資料9 ピザ作りを楽しむ児童

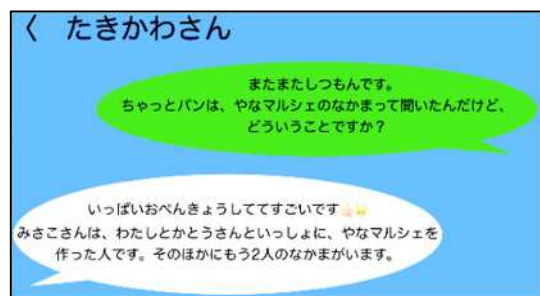
#### (4) 友達のおかげで気づけたことに喜びを感じるA児（第20時）

第20時では、ちゃっとパンへの町探検を振り返った。資料10のE児「でも…」、I児「…ってどう

I：なんでピザを作らせてくれたのかね？	資料10 話し合いの記録
F児：みんながやりたい！って言ったからだよ。	
E児：え、でも、それはやなマルシェじゃなかったっけ？	
H児：茶谷さんは、やなマルシェの仲間って言ってたよ。	
I児：やなマルシェの仲間ってどういうことですか？	
D児：みさこさんは、やなマルシェで一緒に手伝っているんだよ。	
※みさこさん…ちゃっとパンを経営する茶谷さんの奥さんのこと	

いうこと？」のようなかわり合う話し合いが行われた。普段から八名地域の施設によく足を運ぶD児の発言(波線部)に学級の疑問が集中したため、教師は「今、滝川さんにLINEしてみようか？」と事前に準備した

資料11 (ICT機能を活用したLINEを真似たもの)を提示した。「みさこさんがやなマルシェを作ったメンバーだったから、ちゃっとパンも自分たちの夢を叶えてくれたんだ」と自分たちだけで、やなマルシェとちゃっとパンのつながりに気づいた。A児も「Dちゃんが言ってくれたから気づけたね」と言った。これは、疑問をその場で地域の人に聞けるという臨場感ある工夫を行ったことで、自分たちだけで新情報に辿り着いたという児童の達成感をもたらしたと考える。



資料11 滝川さんからのメッセージ

### (5) 学習発表会で伝えたいことを一生懸命言葉にするA児（第21～30時）（資料12）

3か所への町探検が終わり、「みんな知ってる？八名のたから」という教師の第1時と同様の質問に、児童は次々に答えた。そして、「誰かに伝えたい！」という話になり、次の目標は、「学習発表会で、お家の人に八名のたからを伝えること」になった。A児のグループでも、何をいちばん伝えたいかについて、活発な話し合いが行われた。これは、手立て①のように、一から内容を考えていく必要性のある話し合いの時間を設けたことで、A児はど



資料12 発表する児童たち

んとん友達の意見に必死にかかわっていきこうとしたからだと言える。また、これまで町探検で地域の方に質問したり、友達に自分の意見を認めてもらったりする経験を通して、A児は、本単元前の

「僕が言ってもどうせ」という消極的な姿から、自分の意見をまずは伝えてみようとする姿に変わったのだと考える。A児が一貫して地域の方に質問してきた「世界に一つ」という言葉が、どのグループでも伝えたい内容であったとわかると、大変嬉しそうであった。

### (6) 大好きな八名のために動いたA児（第31～38時）

学習発表会后、地域の方の写真を貼りながらこれまでを振り返っていると、P児が「どんどん仲間が増えたね」と発言した。教師が「素敵だね、みんなのことを考えてくれた人がいっぱい」と言うと、A児はすっと手を挙げ、「みんなってというのは、『八名のみんな』って意味だと思って、八名の人は、八名のみんなが笑ってくれたらいいって思ってるんじゃないかな」と八名の人のことまで考えた発言をした。これは、教師がA児に期待した、相手の話をよく聞いた上で、自分の思いを大切にしながら、進んで友達とかかわっていく姿そのものであり、手立て②や手立て③を実践した成果であると考えられる。教師の「仲間もっと増えるかな？」に、F児が「うちらもやなマルシェの仲間に入りたい！」と続いたことで、八名の人への「お返しの日」に向けて学習が進むことになった。普段から手立て②を繰り返したことで、みんなで一つのものを作り上げていく場面において、児童同士でかかわっていきこうとする姿があった。「クリスマスツリーを届けたい！」という願いが話し合いで生まれたため、2学期中に制作した。A児は、「僕、土曜日いつも行くから」とみんなで作ったツリーを届ける係に立候補し、加藤さんに無事に届けることができた（資料13）。これは、A児が友達のおかげでたくさん気づいた経験から、「自分もみんなのためにやりたい」という気持ちが生まれたために表れた行動だと考えられる。



資料13  
加藤さんにツリーを届けるA児

### (7) 八名の力になりたいと決意したA児

3学期からお返しの日に向けて動き出した。会の名前は、話し合いの結果、みんなの夢を叶えるやなマルシェの仲間になるという意味で、「みんなのゆめをかなえる会」となった。児童は、「五平餅のお店を出したい！」「自分たちもいらぬものをリサイクルしたい！」（A児発案）「八名の人を学校に招待したい！」と、たくさんの願いを口にした。加藤さんや滝川さんも、「私たちの夢は、八名のみんなの笑顔が増えることなので、全部叶えよう！」と前向きな答えをくださり、以下に示すような第3弾に渡る『みんなのゆめをかなえる会』が実施されることとなった。

### 『みんなのゆめをかなえる会①』

加藤さんからの「お年寄りの夢を叶えてほしい」との声を受け、第1弾は、お年寄りの方が毎週やなマルシェで開催している「結カフェ」に児童も一緒に参加した。お年寄りの方と健康体操や童歌、ゲームで楽しんだ。A児も、ペットの話で盛り上がり、最後には「この授業最高！」と伝えていた。他の児童も、「おじいちゃん、おばあちゃんと話せて楽しかった」「恥ずかしかったけれど、慣れてきた」などと振り返った。

### 『みんなのゆめをかなえる会②』

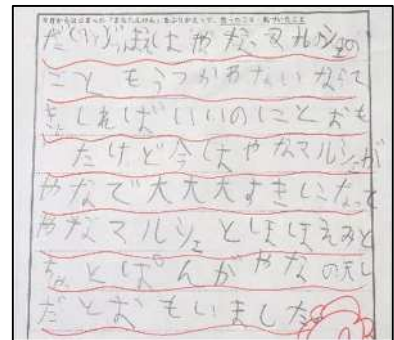
児童が作った「五平餅の歌」(資料7)の10番「♪みんなでお店を出そうかな」から、「五平餅のお店を出したい!」という願いにつながった。2学期の五平餅作りの経験を生かし、地域の方と一緒に作った156本の五平餅を販売した。また児童は、誰かのためになるかもしれない不要になった品を各自値段を付けて持ち寄り、フリーマーケットを開いた。「いらっしやいませー」「安いよー」と声を張り上げ、会計にもすすんで挑戦する姿が見られた。A児も、「袋つけてあげた方がいいら?」と、フリーマーケットに来たお客さんを想う発言をしていた。

### 『みんなのゆめをかなえてくれてありがとうの会』



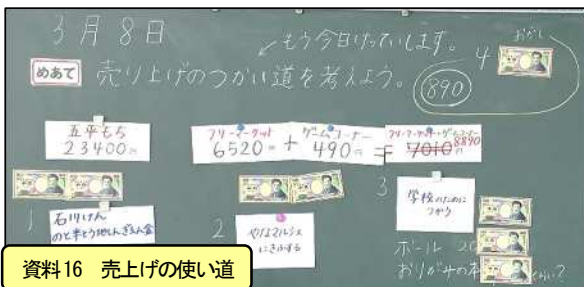
資料14  
地域の方と握手するA児

これまでお世話になった地域の方全員に声をかけ、学校に招待した。「全部のありがとうを込めなきゃ!」という児童の声で、会の名前も新たにみんなで考えた。当日は、27人の地域の方と、歌やかるたを楽しんだり、ウォッチングルームから一緒に八名を見渡したりした。最後には、お手紙や折り紙の花をプレゼントした。児童は、95歳のおじいさんの「こんな会は初めてでとっても嬉しかった」という言葉にははにかんだ。加藤さんの「私たちの夢は、みんなに八名を大好きになってもらうことだったんだよ。私たちの夢を叶えてくれてありがとう。でも、まだまだみんなと夢を叶えたいな」という言葉に、「来年もやろー」と意気込んでいた。A児は、会が終わると、95歳のおじいさんの元へ「握手してください」と駆け寄り、「これで僕も長生きできる!」と喜んでいて(資料14)。A児の振り返りには、資料15のように、「今はやなマルシェがやなで大大大すきになって、やなマルシェとほほえみとちやっとばんがやなの天しだとおもいました。」と書かれていた。



資料15 A児の振り返り

後日、地域の方から手紙やプレゼントが届いた。児童は、「お返ししたのに、またお返しされちゃったね」と照れ臭そうであった。「みんなのゆめをかなえる会②」と「みんなのゆめをかなえてくれてありがとうの会」は、児童が一から作り上げていった会だった。準備から片付けに至るまで、友達とか



資料16 売上げの使い道

かわることを楽しみ、自ら物事に取り組み続ける姿がたくさん見られた。「自分たちの夢を叶えてくれた八名の人にお返しをしたい」と明確な目標を全員がもっていたからこそ、3学期の実践へと広がっていったといえる。また、振り返りシートには、「みんなの笑顔が見れて嬉しかった」「人の力に

なれてよかった」「自分たちもよくがんばったから、ずっと思い出として残したい」といったことが書かれていた。自分たちの頑張りに達成感を得たり、相手の笑顔から喜びを感じたりする児童の姿は、本単元での成長を表すものだった。最後に、五平餅やフリーマーケットの売上げの使い道をみんなで話し合った。手立て②の発言段階表を用いた話し合いを3時間に渡って行い、1. 能登半島地震への義援金、2. やなマルシェに寄付、3. 学校のために使うの3つに決定した(資料16)。1と2は加藤さんに託し、3は、修了式で全校の前でお披露目した。「人のために」という児童の気持ちが、3学期の実践を最後までつなげていった。

#### 学校外で見られたA児の変化(A児の母や滝川さんからの聞き取りより)

- ・やなマルシェでポケモンカードを買うことが毎週の楽しみで、家の手伝いを必死にやっている。やなマルシェが今後も続くように八名に住み続けたいと話している。(A児の母からの聞き取りより)
- ・地元の高校に行って農業か林業をすると宣言した。(滝川さんからの聞き取りより)

### 3 成果と課題

#### (1) 成果

**【仮説Ⅰ】** 発言の意欲を掻き立てるような話題やそれを支える話し合いの仕方の支援をすれば、双方向的なコミュニケーションを楽しんで行うのではないか。

- ・学習発表会やお返し会に向けた話し合いの場は、児童が一から作り上げていく、自由と責任が伴うものだったからこそ、活発に交流し、「みんなでがんばった」という達成感を生んだ。
- ・発言段階表を常に掲示し、取り組んだことで、友達の話をよく聞いて発言した。「D児のおかげで気づけた」という資料10のA児の発言は、双方向的なコミュニケーションの中でこそ生まれた。

**【仮説Ⅱ】** 地域に密着した体験活動を多く取り入れ、児童の「知りたい! 伝えたい!」という願いを大切にしながら単元構想を組んでいくことで、主体的で継続的に学んでいくのではないか。

- ・児童にとって身近でかわりの深い地域を教材にし、人と触れ合い体験活動をしたことで、八名を身近に感じ、休日にもお家の人と何度も足を運ぶ姿が見られた。
- ・ウォッチングルームから町探検の場所を決めた第1時から最後の会まで、児童の願いから単元を展開してきたことで、児童は、長期的かつ意欲的に取り組んだ。終末に単元の流れをすらすらと説明する姿は、主体的で継続的に学んできた成果である。資料1のように、最初は「交番」「ポスト」とだけしか書かなかったA児は、終末で資料15のように、お世話になったやなマルシェ、ほほえみ、ちゃっとパンを「天使」と表現した。これは、友達や地域の方とのコミュニケーションの中で、八名への愛着が育まれ、さらには、次は自分が八名の力になりたいと自ら行動する姿に変容したからであるといえる。A児の友達や地域の方に進んでかわり続けている姿から、本実践は自分に自信がなく、ある程度のところで満足してしまっていたA児の成長を促した。

#### (2) 課題と研究主題に向けて

本単元は、児童の思いや願いで構成されていくために、教師が何を児童の目標と設定し取り組んでいくかが大切になり、そこには地域の協力が不可欠である。また、児童の周りは、地域の人に加え、自然や歴史などの八名のたからにもたくさん囲まれている。3年生になれば、社会科や総合的な学習の授業が始まる。そのため、これらへのスムーズなつなぎも考慮した終末も考えることで、児童から湧き出る素直な思いや願いを大切に、児童が生活の中で学び続けられる授業を追究していきたい。



# 第2分科会

【提案者】 豊田市立古瀬間小学校 教諭 植田 新子

〈提案内容〉

地域の方や上級生、友達と関わりながら、思いや願いを実現するために  
粘り強く取り組むことができる子の育成  
1年「日本の遊びに親しもう～昔遊びマスターになろう～」の実践を通して

【提案者】 蒲郡市立形原小学校 教諭 柴田 春菜

〈提案内容〉

友達や身近な人とかかわりながら、自ら追究する子の育成  
—1年「見て見て！ぼく・わたしのびゅんびゅんごま  
～作って・回して・技をみがいてパワーアップ～」の実践を通して—

【司会者】 豊田市立御作小学校 教諭 鈴木 美帆

【助言者】 愛知教育大学生生活科教育講座 教授 中野 真志 様

**地域の方や上級生、友達と関わりながら、  
思いや願いを実現するために粘り強く取り組むことができる子の育成**  
— 1年 「日本の遊びに親しもう～昔遊びマスターになろう～」の実践を通して —  
豊田市立古瀬間小学校 植田 新子

## 1 単元について

### (1) 主題設定の理由

本学級の子どもたちは、好奇心旺盛な子が多く、たくさんのことに興味をもつことができる。「いきものさがし」の単元では、校内にいる生き物を次々に見付け友達と一緒に捕まえ、虫かごの中に入れて観察をした。他の児童の捕まえてきた虫も楽しんで観察する意欲的な姿が見られた。その後、子どもたちは「飼育したい」と虫のすみかを調べたり、餌を探したりしていたが、そのうち「餌を探すのが大変だし、めんどくさい」「休み時間に他の遊びがやりたくなった」と飼育をやめる児童が増えていった。興味をもつことができても継続せず、すぐに飽きてしまう実態から、本学級の児童に思いや願いを実現するために粘り強く取り組む経験をしてほしいと考えた。

そこで、本単元「日本の遊びに親しもう」で、子どもの「できるようになりたい」「上手になりたい」という思いや願いを引き出し、繰り返し昔遊びと関わることを通して、粘り強く取り組むことの良さや思いや願いを実現する楽しさや喜びを感じてほしいと思い、本研究を進めることにした。

### (2) めざす子ども像

地域の方や上級生、友達と関わりながら、思いや願いを実現するために粘り強く取り組むことができる子

### (3) 仮説と手立て

【仮説①】子どもが思いや願いをもつことができる単元構想と、いつでも昔遊びと関わることのできる環境を整えれば、学習に対する意欲を持続し、粘り強く学習に取り組むことができるだろう。

【仮説②】友達と関わることで、新しい考えに気付いたり、気付きを深めたりできるだろう。

〈仮説①に対する手立て〉

#### 【手立て①】地域の方（名人）や上級生と関わる活動の設定

昔遊びの道具で楽しそうに遊ぶ姿や、かっこいい技を見ることで児童が「やってみたい」「2年生や名人みたいになりたい」という思いや願いをもったり、上達するためのこつに気付いたり教えてもらったりできる場を設定する。

#### 【手立て②】いつでも昔遊びができるような環境を整える

児童一人一人が思う存分昔遊びと関わるように、生活科室をいつでも昔遊びができる場とし、使える道具を十分に用意する。

〈仮説②に対する手立て〉

#### 【手立て③】友達とこつを共有する、パワーアップ会議の設定

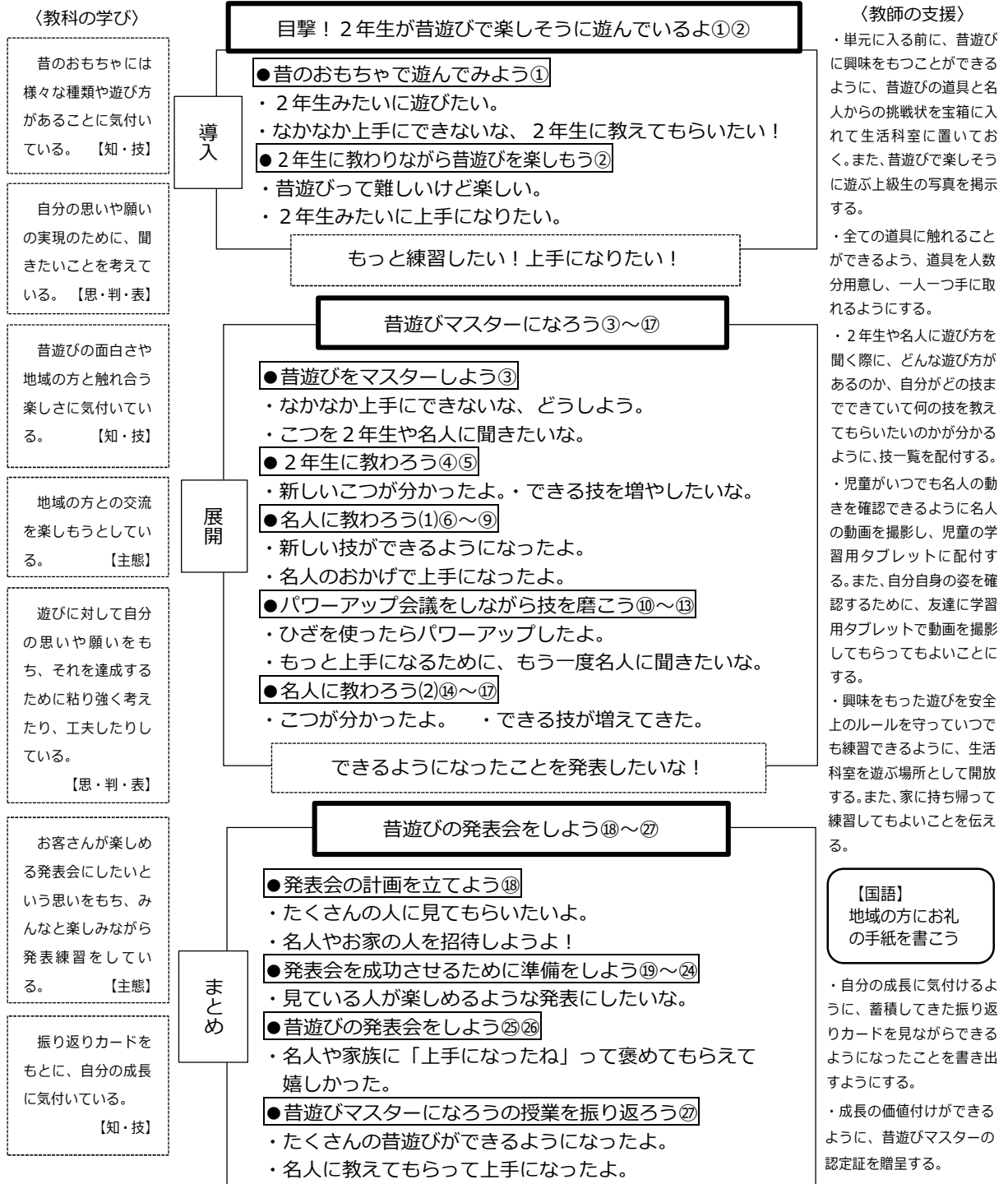
児童が新たな考えに気付くきっかけになったり、気付きを深めたりできるように、児童が見付けたこつを共有する場を設ける。

### (4) 単元構想図（次ページ）

(4) 単元構想 (27時間完了) 「日本の遊びに親しもう～昔遊びマスターになろう～」

【子どもの実態】(○できていること ▲課題)

○好奇心旺盛な子が多く、たくさんの方に興味をもつことができる。 ○友達と関わる活動が好き。  
▲できないことがあれば諦めてしまう、一つのことに根気強く取り組むことができない子が多い。



名人にたくさん褒めてもらえて、マスターになれて嬉しかった！来年は、ぼくたちが1年生に教えたいな。

【めざす子ども像】

地域の方や上級生、友達と関わりながら、思いや願いを実現するために粘り強く取り組むことができる子

## (5) 抽出児童について

	児童の実態	教師の願い
A児	様々なことに興味をもつことができるが、継続して取り組むことは少ない。また、自信が無いこと、他の児童と比べて自分が上手にできないことには挑戦しようとしなかったり、すぐに諦めてしまったりする。	昔遊びと繰り返し関わることを通して、粘り強く取り組むことの楽しさや良さに気付いたり、自分の思いや願いが実現することの喜びを感じたりしてほしい。

## 2 実践経過と考察

### (1) 見て見て！2年生すごいね！（手立て①）

9月下旬、きらきらの宝箱を作り、その中に昔遊びの道具と名人からの挑戦状を入れ、好奇心をくすぐる仕掛けを設定し、児童が見つけられるようにした。【写真1】児童が宝箱に気付き、中身を確認すると、「こまだ！」「これ、おばあちゃんの家にある、けん玉だ！」とわくわくした表情で手に取っていた。「子ども園のときにやったことあるよ」と言って遊ぼうとするも、なかなか上手に使えずにいた。それから一週間、宝箱を生活科室に置いた。初めは、多くの児童が道具を手に取り、遊んでみるものの5日も経つとほとんどの児童が興味を失くしていた。



【写真1 昔遊びと出会う児童】

次の週の休み時間、生活科室に入っていく2年生に気付いた児童の「2年生が昔遊びをやっているよ！」という声で、たくさんの児童が覗きに行った。そこには、道具を慣れた手つきで操り、楽しそうに遊ぶ2年生の姿があった。「2年生すごい！」「私もあんな風にやりたい」と本学級の児童も次々と遊び始めた。休み時間が終わると、「2年生がやっていた技をやりたい！」と児童の思いが膨らんでいる様子が見られた。A児も、「2年生みたいにこまを回したい」と自分の思いをもつことができていた。

### (2) 2年生に教えてもらいたいな（手立て①）（手立て②）

児童の思いや願いを膨らませたところで、単元がスタートした。単元の初めに、全ての道具に触れる時間を作った。その時間の振り返りでは、「やり方が分からない」「2年生みたいに上手になりたい」という意見が出た。A児は、こまを1度だけ回すことができ、「こまは、楽しかった」と振り返りに書いていた。それ以外の道具は、手に取ってすぐに遊ぶのをやめてしまった。理由を聞くと「やり方が分からないし、あやとりはこども園のときに全然できなかったからやりたくない」とこっそり教えてくれた。授業の終わりに、「これからどうしたい」と問うと「2年生に教えてもらいたい」という声が返ってきた。そこで、2年生に教えてもらう時間を2回設けた。【写真2】1回目では、2年生にじっくり教えてもらうことで、「あやとりでゴム管が作れるようになった」「けん玉の持ち方が分かった」等、嬉しそうに話す児童の姿が見られた。A児に声を掛けると「こまは、優しく投げた方がいいんだって！」と2年生に教えてもらったコツを意識して、何度も練習していた。2回目では、子どもたちが何の技を教わりたいのかを具体的に2年生に伝えられるように、活動前に技一覧を配付した。子どもたちは「技のメニュー表」と呼び、「この技を教えてほしい」と



【写真2 2年生との関わり】

指差しながら2年生に願いを伝えることができた。A児も、こまを教えてくれるお兄さんに『犬の散歩』を教えてください』と願いを伝え、2年生に技のこつをじっくり教えてもらい練習することで一人でできるようになった。自分の願いを実現でき、満足そうだった。他の遊びについては、なかなか上達せず、特にあやとりを教わる場面では、2年生に「できているよ!」と言われても、「なんか違う」と言って途中で諦めてやめてしまった。【写真3】



【写真3 あやとりを教わるA児】

2年生との関わりの中で、こつを見つけた子どもたちは、休み時間にも練習するようになった。そこに2年生も駆けつけてくれた。A児は、2年生の側へ行き、真似をしながら何度もこまの練習をしていた。そこで、2年生が「紐掛け手乗せ」という難しい技を披露してくれた。A児はじっと見た後、真似し始めた。声を掛けると「あの技ができるようになりたい」と迷わず答えた。難しい技を目の当たりにし、A児の中に「もっと上手になりたい」という気持ちが芽生えているようだった。そこで、2年生が「きれいにこまを回せないと『紐掛け手乗せ』はできないよ」と教えてくれた。A児は、2年生と自分の回したこまを見比べて、「自分のこまはぐらぐら回っている」と気づき、『紐掛け手乗せ』ができるように、こまをきれいに回せるようになりたい」と具体的な課題をもつことができた。

### （3）ぼくたちも名人に教えてもらおうよ！（手立て①）

2年生との関わりの中で、子どもたちはできるようになったことが増えたり、思いが膨らんだりしたが、「もっとできる技を増やしたい」という声が挙がった。すると、ある児童の「2年生は名人に教えてもらったんだって」という言葉に「私たちも教えてもらおうよ」という声が広がった。子どもたちはわくわくした様子で賛同した。そこで、名人に教えてもらう時間を設けた。【写真4】できるようになった技がさらに増え、子どもたちはとても嬉しそうだった。A児は、こま名人に「きれいにこまを回したい」と思いを伝えると「遠くに投げるようにするといいよ」というアドバイスをもらった。アドバイス通り練習し、安定して回せるようになっていた。活動後、「こまを自分に近付けすぎない」と自分の言葉でこつを書いた。お手玉やけん玉も、練習方法を丁寧に教えてもらうことで感覚を掴んだようだった。A児が一番苦手意識をもっているあやとりについては、教わっている途中で輪から離れたたり、うろうろ歩き回ったりして、未だ前向きに練習できていない様子であった。【写真5】



【写真4 名人との関わり】



【写真5 挫けるA児】

活動後、名人の方々に協力していただき「名人動画」を撮影した。撮影した名人動画は、児童の学習用タブレットに配付し、児童がいつでも動きや手順を確認できるようにした。児童は、動画をじっくり見たり、自分のタイミングで止めたりしながら練習をしていた。【写真6】



【写真6 名人動画を見ながら練習する様子】

#### (4) 授業だけじゃ時間が足りないよ、もっと練習したい！(手立て②)

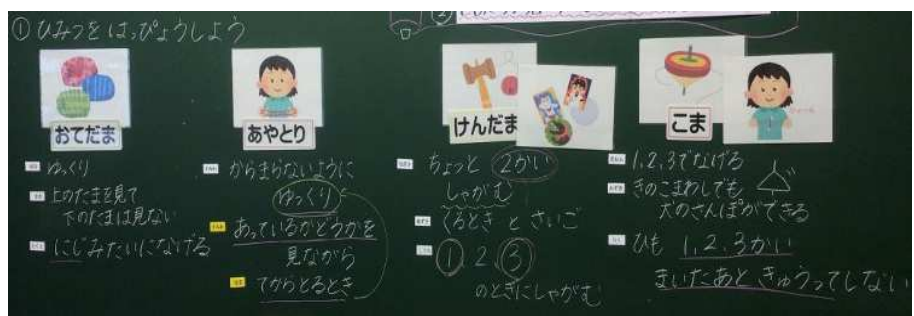
活動の中で、「授業の時間が短い！」「もっと練習したい」という声が挙がった。そこで、子どもたちが思う存分昔遊びができるよう、家庭から持ってきた巾着に昔遊びの道具を入れて、自席にかけておくようにした。【写真7】すると、短い時間でも巾着から昔遊びの道具を取り出し、練習するようになった。A児は、長い休み時間に生活科室でこまを練習し、短い休み時間では自席でできるお手玉やぶんぶんごまを練習した。さらに巾着を家に持ち帰って練習し、毎日多くの時間を昔遊びに費やしていた。A児は、休み時間に生活科室で、B児と一緒に「紐掛け手乗せ」を練習するようになった。2人で一緒に練習する内に紐に掛けたこまが指先に触れるようになり、「もう少しで手のひらに乗る！」「頑張ろう！」と2人で喜び合ったり、励まし合ったりして練習を続けていた。



【写真7 巾着】

#### (5) どうやったら上手くできるか教えて！(手立て③)

休み時間の練習中、こまが回せず泣き出した児童がいた。それに気付いた児童たちが今まで書きためてきたコツを伝えたり、隣でやって見せたりして教えていた。すると、泣いていた児童が一度だけこまを回すことができ、みんなで喜んだ。この出来事を授業の中で紹介し、今まで見付けてきたコツをクラスで発表し合うことで、みんなでパワーアップする、「パワーアップ会議」を開くことにした。子どもたちは会議に向けて、休み時間にたくさん練習し、自分が見付けたとっておきのコツをワークシートに書きためていた。A児は、「20個もコツを見付けたよ」と見せてくれた。休み時間にも練習することで、子どもの気付きが増えていることを感じた。パワーアップ会議は、全4回行った。会議後の活動では子ども同士で教え合う姿も見られた。しかし、1回目の会議では、A児は友達のこつを試そうとせず、ひたすら自分で練習していた。その時間の振り返りで「〇〇さんのこつを試したら、できるようになった」と書いていた児童を紹介した。すると、2回目の会議では、他の児童のこつを試すA児の姿が見られた。A児は他児童の「お手玉は、ゆっくり落ち着いて投げる」「下の玉は見ないで、上の玉だけを見て投げる」というこつを試した。会議の中で、実際に手本を見せてもらうことで、A児もイメージができたのか、すぐに吸収し練習し始めた。A児は、連続ではないが101回お手玉を投げることができ、とても喜んでいて。その後の休み時間も、「今度は連続100回やりたい」とお手玉を練習していた。友達のこつを試すことの良さを感じたA児は、3回目の会議では、「こまは1、2の3で投げる」というこつを試した。すると、こまが上手に回り、「紐掛け手乗せ」に挑戦すると、一瞬手に乗せることができた。A児は、「惜しい！」と言って、夢中になって練習した。4回目のパワーアップ会議では、「こまの紐を巻くときは、1、2、3回こまに巻きつけた後、きゅうってしないで(力を入れずに)巻く」とC児が手本を前で見せながら発表した。C児が巻いた紐がとても綺麗で子どもたちは、「すご



【写真8 パワーアップ会議で出たこつ】

い！」と声を挙げていた。A児は、C児のこつを試し、こまを回すと一瞬手に乗せることができ、嬉しそうだった。

### (6) 一緒に練習しよう！(手立て②)

パワーアップ会議後、A児は再びB児と練習を始めた。パワーアップ会議では、「こつを言いたくない」と言って発表しなかったA児だったが、こつを教え合う良さに気付いたのか、B児とアドバイスをし合う姿が見られた。

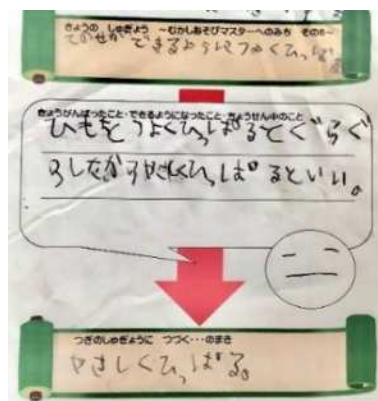
【資料9】【写真10】A児が諦めずにこまを何度も練習していると、そこへ他学年の教員が生活科室へ来て、「紐掛け手乗せ」を披露した。A児はじっと見つめていた。そこで「こまを投げるときにはスピードをつけるように紐を引っ張るといいよ」と教えてもらい、A児はその場で試し、できるようになるまで紐を引っ張りながら綺麗にこまを回す練習を何度も繰り返した。数日後、A児は、初めて3秒間手に乗せることができた。A児も周囲の児童も教師もみんな喜んで。A児は、「諦めずに練習して良かった」と涙を浮かべて話した。練習を始めて1か経った頃だった。「紐掛け手乗せ」を習得したことで自信をもつことができたA児は、「練習すればできるはず」と言って、こま以外の遊びにも挑戦し始めた。お手玉も100回続けることを達成し、けん玉も「大皿」「中皿」「小皿」「とめけん」「ろうそく」と次々に達成していった。ぶんぶんごまも1分間回し続け、めんこもあつという間にひっくり返すことができた。A児は、自分の思いを次々と実現することができて、とても嬉しそうだった。

A児：Bくんは、こまがぐらぐらしてるから、きれいに回すといいんだって。  
B児：きれいに回すって床に刺さるみたいになってこと？  
A児：そう！  
B児：(回して見せる) ころ？  
A児：そうそう！上手い！  
B児：紐は一回、回すとやりやすいよ。  
A児：ころ？  
B児：そうそう！惜しい！

【資料9 A児とB児の会話】



【写真10 A児とB児の教え合う姿】



【資料11 A児の振り返り】

### (7) 名人やお父さん、お母さんに見て欲しいな(手立て②)

これまで、たくさんの技ができるようになった子どもたちから、できるようになったことを発表したいという声が挙がった。その言葉に、子どもたちはわくわくした様子で、「サーカスみたいにかっこよく発表したい」「お父さん、お母さんに見てほしいな」「教えてくれた名人も招待したい」と賛同した。ここから、昔遊びサーカス団の一員として、また練習に力が入った。A児は「『紐掛け手乗せ』を披露したい」と言った。成功させるために、紐を優しく引っ張ると良いことに気づき、

【資料11】紐を引く力加減を調節しながら何度も練習していた。

発表会本番、緊張しながらも、A児の「紐掛け手乗せ」は見事に成功した。【写真12】また、名人にお礼の手紙を渡す場面では、名人の方々が子どもたちの成長と頑張りをたくさん褒めてくださり、「名人に褒められた！」と、とても嬉しそうだ

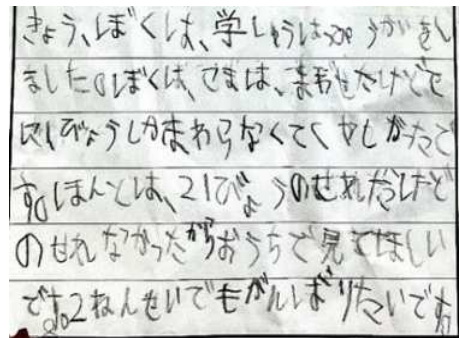


【写真12 発表会当日のA児】



【写真13 名人に手紙を渡す会】

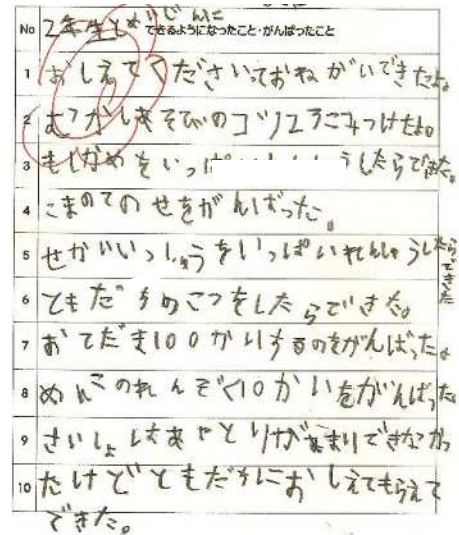
った。【写真 13】教室に戻ると、A児は「まだ、練習したい」と言った。振り返りを読むと発表会を終えてもさらに「お母さんにもっと手に乗せているところを見てもらいたい」という思いをもっていることが分かる。【資料 14】発表会後もA児は、昔遊びに打ち込み、今まで避けていたあやとりにも前向きに取り組んだ。友達に教えてもらったり、名人の動画を見返したり、教室にある本を読んだりして、あやとりも次々とできるようになっていき、友達と喜び合っていた。A児は、粘り強く取り組み、思いや願いを実現させてきた経験から、抵抗のあったあやとりにも挑戦することができたのではないかと考える。



【資料 14 A児の振り返り】

### (8) できないと悔しいけれど、できるととっても嬉しいね！

発表会に向けて自分の自慢の技を練習し続けた子どもたちは、発表会后、休み時間に他の技の練習をし始めた。発表会で他の児童の技を見て、刺激を受けたようだった。単元の振り返りを行う際に認定証を渡すことを子どもたちに伝え、「待って！まだ出来ていない技がある！」「もう少し練習したい！」と張り切って練習していた。A児は、技一覧をじっと見て、けん玉の「もしかめ」と「古瀬間世界一周」という技ができていないことに目を付けた。これらの技は難しく、習得した児童が少ない。A児は、けん玉を持ち練習を始めるが、なかなか成功せず、「この二つができれば、全部クリアになるんだけどなあ」と悔しそうに呟いていた。次の日、A児は「世界一周」を習得している児童に「どうしたらできるの」と自分から声を掛けた。A児が自分から教えてほしいと友達に声を掛けたのは初めてだった。声を掛けられたD児は、「玉をたくさん動かすときできないから少しだけ上げるんだよ」とやって見せた。A児は、教えてもらったコツを意識して何度も何度も練習し、これまでできなかった「世界一周」も習得した。「世界一周」をやり遂げた自信が全種目をクリアしたいという気持ちに拍車をかけた。そして、すぐに「もしかめ」の練習を始めた。A児は、またD児に声を掛け、アドバイスをもらっていた。それから一週間、ひたすら練習し続けて、見事成功させ、技一覧に載っている技を全て達成した。A児は、全種目を達成した技一覧を何度も見返し、喜びを隠しきれない様子だった。



【資料 15 A児の振り返り】

単元の振り返り時に、「できるようになったこと・がんばったこと」を10個、書き出させた。A児は、「いっぱいあるけど10個ならとおきのを書きたい」とこれまでのワークシートやコツを書きためた用紙を見ながら、これまでの自分



【写真 16 認定証とメダル】



【写真 17 認定証授与式  
(技一覧の技を全て習得した児童)】



の頑張りを振り返っていた。「できない技もいっぱい練習することでできるようになった」と自分自身の成長に気付いていた。【資料 15】授業の中で子どもたちから「できないときは悔しいけど、できると楽しい」「これからもできないことがあってもできるように練習したい」などという言葉が出てきた。子どもたちは、粘り強く取り組むことの良さや自分の思いや願いを実現することの楽しさや喜びを感じることができたのではないかと感じた。3月、単元の最後に認定証【写真 16】を渡すと子どもたちは、「頑張って良かった」と喜んでいて、【写真 17】また、「まだ、昔遊びで遊びたい!」「今度は僕たちが来年の1年生に教えたい!」と多くの児童が言っていた。

### 3 成果と課題

#### (1) 成果

【手立て①】地域の方や上級生と関わることで、子どもたちは思いや願いを膨らませることができていた。また、技を目の前で見せてもらったり、隣で見比べたりしてコツを掴むこともできた。さらに、地域の方や上級生との関わりの中で全員一つは技ができるようになり、子どもたちが昔遊びの楽しさに気付き、「もっとできるようになりたい」と思いをもつきっかけとなった。

【手立て②】巾着を用意するまでは、生活科室に行き、順番に並んで箱から道具を取り出したり返したりする時間が必要だったが、昔遊びの道具を巾着に入れて自席に掛けておくことで、短い時間でも道具を取り出し練習することができた。また、巾着に入れて持ち帰ることもできた。生活科室をいつでも昔遊びができる場として開放しておくことで、こまやけん玉など、家や教室ではなかなか思う存分使うことができない物でも、繰り返し練習することができた。道具の確保、場所の設定が児童の学習に対する意欲を持続することに繋がったと考える。

【手立て③】子どもたちがコツを発表し合うことで、新たな気付きが生まれたり、「自分はひざを曲げることには気付いていたけれど、ひざを曲げるタイミングが大事なんだね」と気付きが深まったりした。また、パワーアップ会議後は、休み時間にも子どもたち同士で関わり、アドバイスをし合う姿が見られるようになった。昔遊びを上達させ思いや願いを実現させるためには、友達との関わりが有効であったといえる。

A児の様子から、子どもたちは、粘り強く取り組むことの良さや思いや願いを実現する楽しさや喜びを感じられたと考える。

#### (2) 課題

子どもたちの気付きをより深めるためには、友達と関わる機会やコツを共有する機会をもっと増やせると良かったのではないか。また、今回は単元の中盤でパワーアップ会議を開いたが、上達を早め、より深く昔遊びと関わるように、もう少し早いタイミングで会議を開いても良かったのではないかと考える。今後は、児童の実態に合わせて、友達との交流の回数やタイミングを考えていきたい。

#### (3) 研究主題に向けて

他者との関わりや子どもの思いを大切に単元を進めたことで、児童一人ひとりが最後まで粘り強く活動し続けることができた。その中で気付きが深まったり、児童自身が自分の成長を感じたりする姿がたくさん見られた。今後も児童の深い学びへと繋げられるように、他者との関わり合いや子どもの「～したい」という思いを大切に単元を構想していきたい。

## 第1学年 「見て見て！ぼく・わたしのびゅんびゅんごま

～作って・回して・技をみがいてパワーアップ～」

蒲郡市立形原小学校 柴田 春菜

### 1 単元について

#### (1) 単元設定の理由

本学級の子どもたちは、「仲良し大作戦」や「学校探検」を通して、小学校生活という新しい環境での出会いや発見に楽しさを感じ、前向きに活動している。一方で、「学校探検」で見つけた教室のひみつを交流する場面では、考えを伝えることに自信がもてなかったり、伝えるだけで満足してしまい、友達の考えに目を向けることができなかつたりする子がいた。そんな子どもたちが、身近な人とかかわりながら追究する中で、自分の考えを伝えたい、友達の考えを聞きたいという思いをもってすすんで活動に取り組んでほしいと考えた。

そこで、楽しく遊べて、回し方のこつや様々な技を見つけられる『びゅんびゅんごま』を教材とし、本実践を進める。地域団体『まめだ会』の人たちとの交流や友達とふれ合う中で、回し方のこつを追究する楽しさに気付いてほしいと願い、研究主題を「友達や身近な人とかかわりながら、自ら追究する子」と設定し、本実践に取り組むことにした。

#### (2) めざす子どもの姿

- ・「やりたい」「できるようになりたい」という思いをもつことができる子
- ・個々の目標をもち、自ら追究することができる子
- ・身近な人とかかわるよさを感じたり、学びを広げたりすることができる子

#### (3) 仮説と手だて

##### 【仮説Ⅰ】

びゅんびゅんごまとの出あいの場を工夫すれば、「やりたい」「できるようになりたい」という思いをもつことができるであろう。

##### ○手だてⅠーア びゅんびゅんごまとの出あいの場の工夫

- ・びゅんびゅんごまをプレゼントしてもらうさつまいもパーティーの開催
- ・びゅんびゅんごまで遊んでみて思ったことを交流する場の設定

##### 【仮説Ⅱ】

明確な目標設定をし、個の追究に寄り添った支援を行えば、個々の目標をもち、自ら追究することができるであろう。

##### ○手だてⅡーア 明確な目標設定

- ・「びゅんびゅんごま」への愛着と技の数を増やす意欲づけをするためのびゅんびゅんバンド・技シールの活用
- ・目標の達成状況を可視化した見て見て！カードの活用

##### ○手だてⅡーイ 個の追究に寄り添った支援

- ・一人一人の子どもに寄り添った朱書き（パワーアップノート）・対話
- ・いつでもこま作りができる材料コーナーの設置

【仮説Ⅲ】

**友達や身近な人とかかわる場や学びを発信する場**を設定すれば、身近な人とかかわるよさを感じたり、学びを広げたりすることができるであろう。

○手だてⅢーア **身近な人とかかわる場の設定**

- ・自分の見つけたコツを伝え、友達の考えに触れる**びゅんびゅん会**の設定
- ・びゅんびゅん会1での**まめだ会**の人からの**次**につながる声かけ

○手だてⅢーイ **学びを発信する場の設定**

- ・技を披露し、コツを教える**びゅんびゅん発表会**、**学年びゅんびゅん交流会**

(4) 単元構想 (全 23 時間)

**出あい・目標** さつまいもパーティーに来てくれた、地域団体『まめだ会』の人たちから『びゅんびゅんごま』をプレゼントしてもらおう場を設定する。上手に回すまめだ会の人たちの姿を見て、「早く遊んでみたい」という思いをもつであろう。そして、もらったびゅんびゅんごまで遊んだ後、思いを伝え合う話し合いの場を設けることで、「みんなで音を立てて回せるようになりたい」という共通の目標が生まれるであろう。

**個人追究・かかわり合い** みんなが音を立てて回すことができるようにするために、回すコツを「パワーアップノート」に書き記し、試行錯誤するひとり調べを行う。また、追究によって見つけたコツを伝えるかかわり合いの場「びゅんびゅん会」を設定する。個人追究とかかわり合いを、必要に応じて、繰り返すことで、より多くのコツを見つけ、技を磨いていくであろう。

**まとめ** 自分の作ったびゅんびゅんごまで、オリジナルの技を披露したり、回し方のコツを教えたりする「びゅんびゅん発表会・交流会」を開催する。まめだ会の人たち、保護者、他クラスの友達など、様々な人と交流する場を設定する。

出あい・目標	まめだ会の人を招待したさつまいもパーティーで びゅんびゅんごまを見せてもらったよ！①びゅんびゅんごまとの出あい
	プレゼントしてもらったびゅんびゅんごまで遊ぶよ ②遊び ③話し合い
個人追究 ↓ かかわり合い	<b>びゅんびゅんごまを音を立てて回せるようになりたい！</b>
	音を立てて回せるようになりたい！ パワーアップ練習1 ④⑤⑥追究
	びゅんびゅん会1（回し方中心）⑦かかわり合い
	こまを作ったり、技にチャレンジしたりしたい！ パワーアップ練習2 ⑧⑨追究
	びゅんびゅん会2（作り方中心）⑩かかわり合い
	もっといろいろな技を出来るようにしたい！パワーアップ練習3・びゅんびゅん会3 ⑪⑫⑬追究・かかわり
まとめ	出来るようになった技をみんなに見せたい！ パワーアップ練習4 ⑭追究
	びゅんびゅん発表会 ⑮⑯準備⑰学習発表会（まめだ会の人たち・家族）⑱振り返り
	びゅんびゅん交流会 ⑲⑳㉑準備㉒交流会（1の2）㉓振り返り
<b>びゅんびゅんごまが上手に回せるようになってうれしかった！他の遊びにも挑戦したいな！ 友達やまめだ会の人とかかわるのは楽しいな！これからもかかわりたいな！</b>	

## (5) 児童Aのとらえと願い

本実践では、抽出児童Aの変容を追っていくことで手だての有効性を検証していく。児童Aは新しいことにも興味をもって、前向きに取り組むことができる。「学校探検」では、理科室のひみつを班で協力しながら調べ、「石の葉っぱがあったよ」と、ワークシートにまとめた。一方で、大人しい性格で、なかなか自分の伝えたいことが言えず、心の中に留めておくことが多い。

本実践を通して、びゅんびゅんごまを上手に回すコツや様々な回し方をすすんで追究する姿を期待する。そして、友達とのかかわる場を繰り返し設定することで、自分の考えを伝えるよさや友達の考えを聞くよさを知り、人とかかわることを楽しむ姿を願う。

## 2 実践経過と考察

### (1) びゅんびゅんごまと出あい、音を立てて回すことを目指す児童A

#### ① ぼくも回せるようになりたい (手だてI-Aの検証)

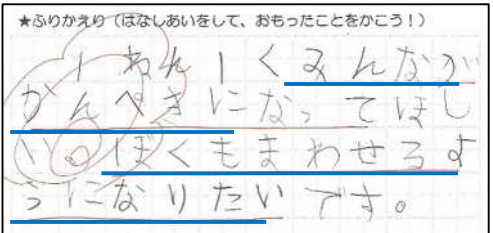
収穫したさつまいもを使って、おにまんじゅう作りをするさつまいもパーティーに地域団体『まめだ会』の人たちを招き、一緒に調理を行った。調理後に、まめだ会の人たちから『びゅんびゅんごま』をプレゼントされ、子どもたちは大喜びをしていた。初めて見るこまをどうやって回すのか、まめだ会の人たちがびゅんびゅんごまを披露する姿をじっくり見た【資料1】。翌日、さっそくびゅんびゅんごままで遊んだが、半数以上が回すことができず、しっかりと回っていないでも「回った」と言っている子もいた。そこで、次時でびゅんびゅんごままで遊んでみて思ったことを話し合う場を設けた【資料2】。びゅんびゅんごまを回す時に、音に注目した子どもから、音から連想されるものがいくつか出てきた。そんな中、C5の「びゅんびゅん聞こえたよ」という発言から、C6が「だからびゅんびゅんごまっていうじゃない?」とつぶやいた。そのことから、びゅんびゅんごまが回っているかどうかは、「音を立てて回すこと」を判断基準にすることが決まった。また、話し合いの中で、困っている子がたくさんいることを知った子どもたちは、「1年1組のみんなが『びゅんびゅん』音が鳴って、できるようにになりたい」という共通の目標を立てた。児童Aは、振り返りに「みんながかんぺきに」「ぼくもまわせるようになりたい」と書き、意欲をもち始めたことが分かる【資料3】。



【資料1】 びゅんびゅんごまに出あう児童Aたち (第1時)

- C1: 回すと音になるよ。
- T: どんな音になったかな?
- C2: 扇風機みたいな音がする。
- C3: 台風の風みたいな音がしました。
- C4: 飛行機のプロペラみたいな音がしたよ。
- C5: びゅんびゅん聞こえたよ。
- C6: だからびゅんびゅんごまっていうじゃない?
- C7: たしかにそうかも!

【資料2】 話し合いの授業記録 (第3時)

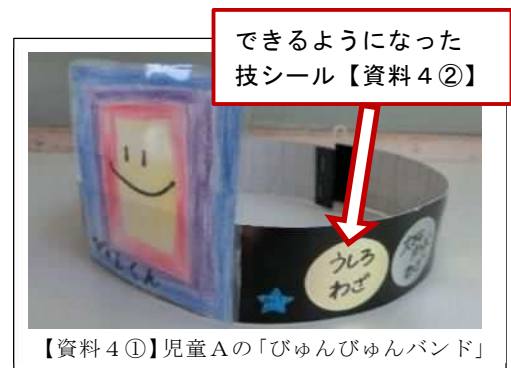


【資料3】 児童Aのパワーアップノート (第3時)

## (2) 音を立てて回すのに試行錯誤する児童A

### ①びゅんくん大好き（手だてⅡーアの検証）

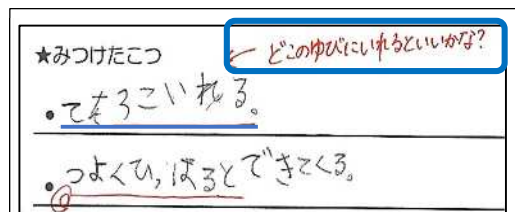
自分のびゅんびゅんごまに名前を付け、それをお面にした「びゅんびゅんバンド」を作成した【資料4①】。児童Aは「びゅんくん」と名付け、びゅんびゅんごまを練習する時は、びゅんびゅんバンドを付けて練習した。びゅんびゅんバンドを毎時間身に付けていたことで、児童Aは放課に遊ぶ時も「びゅんくん付けなきや」と、びゅんびゅんごまをやる時には欠かせないものとなっていた。子どもたちは普段の会話の中でも、「私の『びゅんまる』回しやすいよ」「『ピリピリくん』貸してあげようか」など、こまを名前で呼び合い、びゅんびゅんごまへの愛着を高め、積極的に練習する姿につながった。



【資料4①】児童Aの「びゅんびゅんバンド」

### ②中指、お母さん指、お姉さん指に入れるといいよ（手だてⅡーイの検証）

どうやったら回せるのか、試行錯誤しながら自分で練習することで、「てを3こ入れる」やり方を思いついた児童A。それに対し、「どこのゆびにいれるといいかな」と朱書き【資料5】と対話をし、実際にやって見せてもらった。すると児童Aは、「中指、お母さん指、お姉さん指を入れる」と言い換え、とてもスムーズに回して見せた。3本の指を使って回すと安定し、児童Aにとってやりやすいということが分かった。そして、「すごいこつを見つけたね」と声をかけたことで、「びゅんびゅん会で伝えたい」という思いを引き出すことができた【資料6】。最初のパワーアップ練習では、回せずに困っていた児童Aだったが、いろいろな方法を試し、繰り返し練習したことで、音を立てて回せるようになり、自分なりのこつを見つけることができた。そして、朱書きや対話を行うことで、自分の気持ちを自覚し、「もっとこつを見つけない」「みんなが回せるようになりたい」と、夢中になって追究する姿が見られた。



【資料5】児童Aのパワーアップノート（第5時）

T:「パワーアップノートに書いてあったこつってどうやるの？」  
A:「こうやってやるよ」  
T:「(実際にやりながら)どこの指にいれるといいの？」  
A:「中指とお母さん指とお姉さん指に入れるだよ」  
T:「できた！すごいこつを見つけたね」  
A:「早くみんなに教えたいな」

【資料6】対話の記録（第6時）

## (3) こつを伝え合い、もっとできるようになりたいという思いを高めた児童A

### ①びゅんびゅん会でこつを伝えたい、聞きたい（手だてⅢーアの検証）

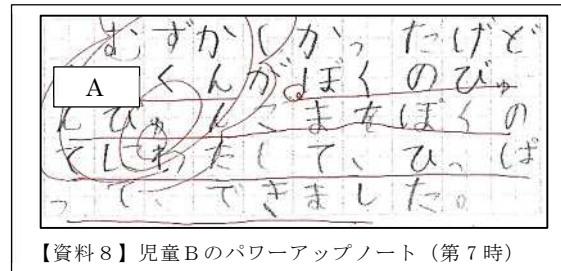
全員が音を立てて回すことができるようになりたいという共通目標を達成するために「びゅんびゅん会1」を設定した。かかわり合いの中で児童Bが「ひっぱるのがむずかしい」と、困っていることを伝えた。すると、児童Aが「(できたら)わたす」と、伝えた。そして、児童Aが回したびゅんびゅんごまを児童Bに渡すと、児童Bは初めて音を立てて回すことができた【資料7（次項）】。児童Bの振り返りには、「むずかし

かったけど、Aくんがぼくのびゅんびゅんごまをぼく  
 のてにわたして、ひっぱってできました」と、初めて回  
 せたことへの喜びが書かれていた【資料8】。また話し  
 合い後に、友達のこつを試す時間を設定した。子ども  
 たちの振り返りには、「児童Cの、のぼすとき強くひっ  
 ぱるのをやったらやりやすかった」「児童Aのやりかた  
 がすごくやりやすかった」と、友達の考えのよさが書



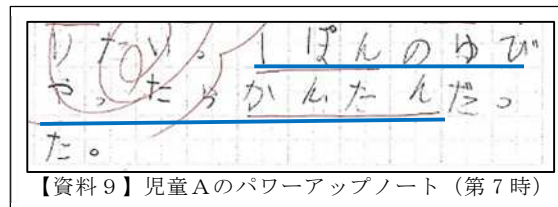
【資料7】 友達を助ける児童A  
 (第7時)

かれていた。児童Aも、友達の方法を試し、  
 「1ぼんのゆびやったらかんたん」と、友達の  
 考えのよさに気付いた【資料9】。児童Aは自  
 分の気付きを友達に広げ、友達の気付きから、  
 さらに自分の考えを広げたことがわかる。



【資料8】 児童Bのパワーアップノート (第7時)

また、びゅんびゅん会1では、まめだ会の人  
 たちにもかかわり合いの様子を見ていた  
 いただいた。子どもたちは、プレゼントをし  
 てもらったびゅんびゅんごまをがんばっ  
 て練習していることを見せるために、すす  
 んで話しかけ、回す様子を見てもらった



【資料9】 児童Aのパワーアップノート (第7時)

【資料10】。びゅんびゅん会の最後には、まめ  
 だ会の人たちから「一生懸命やっていますご  
 い。『びゅんびゅんごまがまわったら』の絵本に  
 出てくる校長先生みたいな技をいろいろやっ  
 てほしいな」と、子どもたちに話してくださ  
 った。児童Aはパワーアップノートに、「いちばん  
 うまく」「つぎはあしでやりたい」と書き、さら  
 にびゅんびゅんごまがうまくなりたいという意欲がうかがえた。このことから、地域  
 の人とのかかわりを通して、更なる技術の向上を目指すきっかけをつくることができ  
 たといえる。



【資料10】 びゅんびゅん会1でまめだ会の人  
 たちに見せる子どもたち (第7時)

#### (4) 作ったり、技を磨いたりするのに試行錯誤する児童A

##### ①音を立てて回るこまを作りたいな (手だてⅡ-Iの検証)

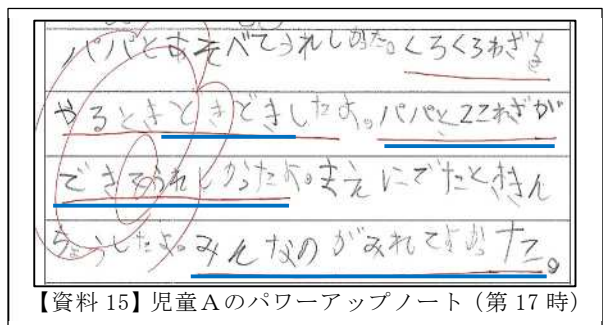
びゅんびゅんごまが回った子どもたちだったが、たくさん練習したことにより徐々  
 にこまが壊れていった。「まめだ会の人たちからもらったようなこまを作りたい」と、  
 こま作りに取り組む子が段々と増えていった。そこで、いつでもこま作りができるよ  
 うに「材料コーナー」を設置した【資料11 (次項)】。紙は工作用紙、コピー用紙、段  
 ボール、ひもはリボン、毛糸手縫い糸、ミシン糸、たこ糸を用意し、こま作りに必要な  
 ものを子どもたち自身が選択できるようにした。子どもたちは、まめだ会の人たちか  
 らもらったこまに再注目し、工作用紙のマス目を数えたり、ひものねじれ具合に目を



ませていった。そこで、技を披露する「びゅんびゅん発表会」の場を設定した。【資料 14】は児童 A がびゅんびゅん発表会で実際に技を披露している時の様子である。いろいろな技の中から、「くろくろわざ(目を閉じた状態でびゅんびゅんごまを回す技)」を披露した。技の披露後、みんなから拍手をもらい、ほっとした表情を見せた。びゅんびゅん発表会後のパワーアップノートには、くろくろわざをやるときに「ドキドキ」「みんなのがみれてよかった」とあり、自分の技を無事に披露することができたこと、友達の技を見ることができたことに対する喜びが書かれていた【資料 15】。また、びゅんびゅん発表会の後半には、保護者と一緒に遊ぶ時間を設けた。児童 A は、お父さんに手伝ってもらって 2 個同時に回す技にチャレンジし、成功させ「パパと 2 こわざができてうれしかった」と振り返った。このことから、保護者と楽しむだけでなく、2 個



【資料 14】「くろくろわざ」を披露する児童 A (第 17 時)

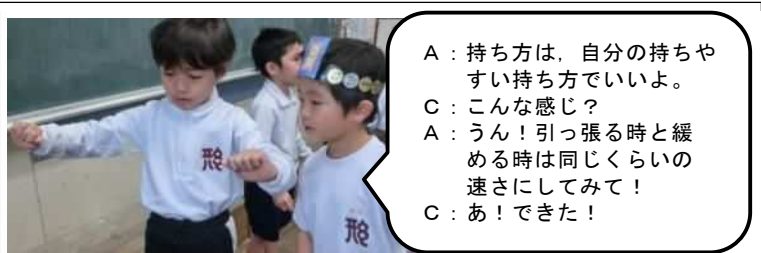


【資料 15】児童 A のパワーアップノート (第 17 時)

技というさらに難しい技にも挑戦してできたことへの達成感が感じられる。多くの子どもたちが「まめだかいさんやおうちのひとがみにきてくれて、うれしかった」「ママもびゅんびゅんごまができてよかった」など、いっしょに回せたこと、教えてあげられたことへの喜びを感じていた。

## ②びゅんびゅんごまを友達に教えたいな (Ⅲ-イの検証)

びゅんびゅん発表会に向けての話し合いの中で、「2 組の子にもびゅんびゅんごまを見せたい、教えたい」という意見があった。1 年 2 組は「ぶちごま」という叩いて回すこまの学習を行っていたため、お互いのこまを披露し、回し方を教え合う場「びゅんびゅん交流会」を設定した。児童 A はびゅんびゅん発表会の時に見せた「くろくろわざ」を再び披露した。2 組の子たちから「普通に回すのも難しそうなのに、目を閉じて回すなんてすごい」と声上がり、児童 A は笑顔になった。また、びゅんびゅんごまと一緒に遊ぶ時間では、初めてびゅんびゅんごまに挑戦する友達に、児童 A から話しかける姿が見られた【資料 16】。このことから、できるようになったことを披露したり、教えたりする活動を取り入れたことで、自ら人(地域の人・家族・友達・他学級の子)とかかわりを持ち、楽しんで活動する姿が見られた。交流会後、単元終末の振り返りで、児童 A は「さいしょはできなかったけど、がんばったらいっぱいおうちの



【資料 16】回し方を教える児童 A (第 22 時)

- A : 持ち方は、自分の持ちやすい持ち方でいいよ。  
 C : こんな感じ？  
 A : うん！引っ張る時と緩める時は同じくらいの速さにしてみよう！  
 C : あ！できた！



人やともだちにほめられてうれしかったです」と、この単元を通して自分が成長できたことへの喜びが書かれていた。

### 3 成果と課題

#### (1) 成果

##### 【仮説Ⅰ】

まめだ会の人たちとのかかわりを通して、びゅんびゅんごまと出あった児童Aは、プレゼントもらったこまをじっと見つめ、「早くやってみたい」という思いをもった。また、びゅんびゅんごままで遊んでみて思ったことを交流する場を設定することで、「音を立てて回す」共通の目標ができた。このことから、びゅんびゅんごまとの出あいの場を工夫したことは、「やりたい」「できるようになりたい」という思いをもつために有効であったといえる。

##### 【仮説Ⅱ】

びゅんびゅんごまを全く回せなかった児童Aだったが、パワーアップ練習で個人追究し、自分で様々な方法を試したことで、回しやすい方法を見つけ、音を立てて回すことができた。材料コーナーを設置したことで、どの材料を使うと音を立てて回すことができるか考え、自分でこまを作ることができるようになった。また、「見て見て！カード」や「びゅんびゅんバンド」を活用することで、「新技を考えたい」「技の数をふやしたい」と、自ら課題を見つけ、追究する姿へとつながった。このことから、個々の目標をもち、自ら追究するするために有効であったといえる。

##### 【仮説Ⅲ】

なかなか自分の伝えたいことを言えず、自分の中に留めておくことが多かった児童Aだったが、「びゅんびゅん会」で自分の考えをすすんで伝えることができた。また、「びゅんびゅん発表会・交流会」で練習してきたことを発表し、こまのやり方を教えたことで、自分の成長を感じるとともに、人とのかかわるよさを感じることができた。単元終了後も、子どもたちから「もっと見せたい」との声が上がったため、6年生にもびゅんびゅんごまを教え、一緒に遊ぶ会を開いた。このことから、友達や身近な人とのかかわる場を設定したことは、人とかかわりに喜びを感じ、学びを広げるのに有効であったといえる。

#### (2) 課題

単元を構想した時には、様々な形やデザインのびゅんびゅんごまを作ることも想定していた。しかし、子どもたちの意識はオリジナルの技を考え、その技で上手に回すことに向けられていた。子どもの思いに寄り添い、必要に応じて追究やかかわり合いの時間を柔軟に設定していきたい。

#### (3) 研究主題に向けて

友達や身近な人とかかわることで、びゅんびゅんごまを「もっとやりたい」という思いにつながった。今後も友達や身近な人とかかわることを通して、自ら追究することの楽しさを感じる授業ができるよう、引き続き研究を続けていきたい。

# 第3分科会

【提案者】 豊橋市立花田小学校 教諭 内藤 千佳

〈提案内容〉

虫の飼育活動を通して、友達と関わりながら、  
生き物（命）を大切にできる子の育成  
～第1学年「いきものとなかよし」の実践を通して～

【提案者】 西尾市立矢田小学校 教諭 杉江 みどり

〈提案内容〉

年長児との交流を通して、  
人と関わることのよさや自分の成長を感じる子の育成  
—1年生活科「おいでん わたしたちの みずまつり」の実践を通して—

【司会者】 西尾市立一色東部小学校 教諭 中嶋 祐子

【助言者】 愛知教育大学生生活科教育講座 教授 柿崎 和子 様

虫の飼育活動を通して、友達と関わりながら、生き物を大切にできる子の育成  
～第1学年「いきものとなかよし」の実践を通して～

豊橋市立花田小学校 内藤 千佳

## 1 単元について

### (1) 主題設定の理由

本学級の児童は、初めて挑戦することにも、興味をもってやってみたく自分からすすんで活動することができる児童が多い。一人一鉢でアサガオを育てた際には、日々変化するアサガオの成長を喜び、友達どうしでうれしそうに伝え合った。また、アサガオの鉢の下にいるダンゴムシを捕まえるなど、生き物にも興味をもち始めた。

そのような子どもたちに、捕まえやすい虫の飼育をする場を設ける。世話をする中で、生き物の育つ場所や成長の様子などの違いに気付いたり、友達と虫の様子や変化、成長の喜びを共感したりすることができるであろう。飼育上の悩みやコツを友達と共有し、解決のための話し合いの場を設ければ、友達の意見を取り入れ、虫にとってよりよい飼育をし、生き物を大切にしたいという思いをもつのではないかと考え、本主題を設定した。生き物を大切にすると、よりよい飼育の仕方を考える姿で見とりたいと思う。

### (2) 目ざす子ども像

虫の飼育活動を通して、友達と関わりながら、生き物を大切にできる子

### (3) 仮説

虫の飼育活動を通して、虫と対話する場や友達と関わる場を設定すれば、虫と仲よくしたいという願いからよりよい世話の仕方に気付き、生き物を大切にしたいという思いが育つであろう。

### (4) てだて

#### ①虫と対話する場の設定

- ・一人一人が責任をもって世話ができるように飼育をする。 「一人一ケース」
- ・毎日虫の健康観察を行い、自分の虫の様子をワークシートに記録する。

「むしむしけんこうかんさつ」

- ・虫のことや世話の仕方などもっと知りたいことを追究できるように、図書資料を用意する。 「むしむししらべコーナー」
- ・虫への思いを引き出せるように、虫の表情を描くワークシートを使用して活動の振り返りを記録する場を設ける。 「むしむしふりかえりシート」

#### ②友達と関わる場の設定

- ・自分の虫の様子を知らせたり、困っていることを共有したりできるように、付箋に書いて教室内に掲示する場を設ける。 「むしむしニュースコーナー」
- ・困り感を取り上げ、アドバイスをし合ったり、喜びをみんなで分かち合ったりできるように、クラス全体で話し合う場を設ける。 「むしむしかいぎ」



## 2 実践経過と考察

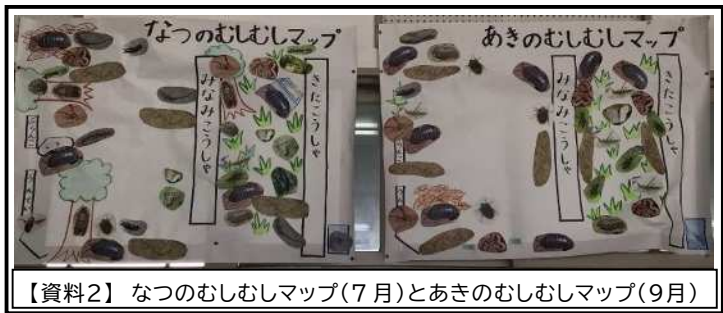
### (1) 虫を見に行きたいな

7月、アサガオの鉢の下にダンゴムシを見つけた子が、「運動場にもダンゴムシがいたよ」「学校にはたくさん虫がいるよ。虫探しに行きたいな」と発言したので、学校の中にいる虫を探しに行くことにした。【資料1】活動後、虫を見つけた場所を出し合い、「むしむしマップ」に見つけた虫の写真を貼った。虫探しや「むしむしマップ」を作成したことで、虫に興味をもつ児童が少しずつ増えていった。9月初め、「7月に鳴いていたセミ



【資料1】アサガオの鉢の下でダンゴムシを見つける児童

がいけないよ」「7月に作ったむしむしマップと違うね」と、今はどんな虫がいるのか興味をもつ児童の声を広げ、みんなで校庭や中庭の虫探しをし、「むしむしマップ」を作成した。2つの「むしむしマップ」が完成したところで、マップを見比べ、話し合う場を設けた。【資料2】全体で気づきを共有したところ、「7月と同じ所にダンゴムシがいたよ」「トンボがたくさん飛んでいるよ」「バッタやコオロギがちょっと大きくなっていったよ」など夏から秋の虫の変化に気付いた意見が出た。



【資料2】なつのもむしマップ(7月)とあきのもむしマップ(9月)

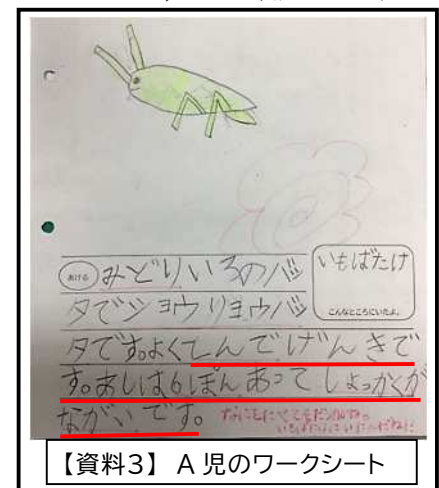
A児は、友達の見解をうなずいて聞いたり、友達が虫を捕まえると寄っていき、バッタやコオロギをじっと見たりしていたことから、虫に興味をもち始めたことがわかった。

### (2) 捕まえた虫を飼いたいな

#### ① 1人1ケースの飼育 てだて1

虫探しをしたり、サツマイモ畑に水やりをしに行ったりした時に、虫を捕まえた児童が、「自分で捕まえた虫を飼いたい」と発言した。他の児童も賛同し、教室内で捕まえた虫を飼うことにした。家にある飼育ケースを持ってくる児童もいたが、最初は、前単元「なつとなかよし」で水鉄砲として使用したペットボトルを飼育ケースにした児童が多かった。

A児も虫の飼育経験がないため、ペットボトルでの飼育を始めた。A児は自分では虫を捕まえられなかったため、友達が捕まえたショウリョウバッタをもらい、立てたペットボトルの中に入れた。「よくとんでげんきです。あしは6ぽんあってしょっかくがながいです」とワークシートに記し、自分の虫をじっくり観察する様子が見られた。【資料3】初めて虫を飼うA児は、「生き物は水がないと生きていけないから」と言い、ペットボトルに2cmくらいの量の水を入れた。しかし、虫は水を入れるのではなく、えさの草を入れるとよいという友達のアドバイスを聞いたり、友達の飼育ケースの



【資料3】A児のワークシート

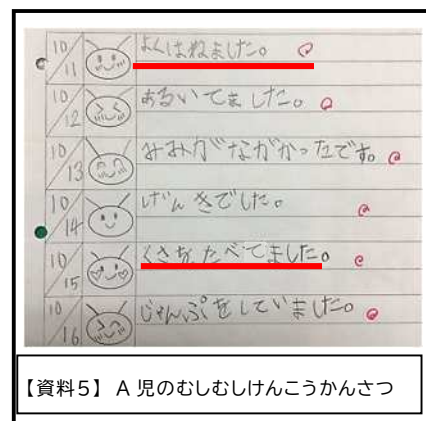
中の様子を見たりした後、慌てて水を出した。その後、バツタはネコジャラシを食べるという友達の意見を聞き、中庭に生えているネコジャラシを取ってきてペットボトルに入れた。できるだけ多くのネコジャラシを入れようと、数回入れ直した。【資料4】慌てて水を出した様子を見て「どうして水を出したの？」と教師が問いかけると、A児は「溺れちゃって友達に聞いたから」と答えた。また多くのネコジャラシを入れたことから、友達の意見を取り入れ、よりよい環境にしようとしていることがわかる。自分の虫であるという意識をもち、大切に世話をしたいという思いを持ち始めたことがわかる。



【資料4】  
ネコジャラシを入れるA児

②「むしむしけんこうかんさつ」「むしむしニュースコーナー」「むしむししらべコーナー」**てだて1** **てだて2**

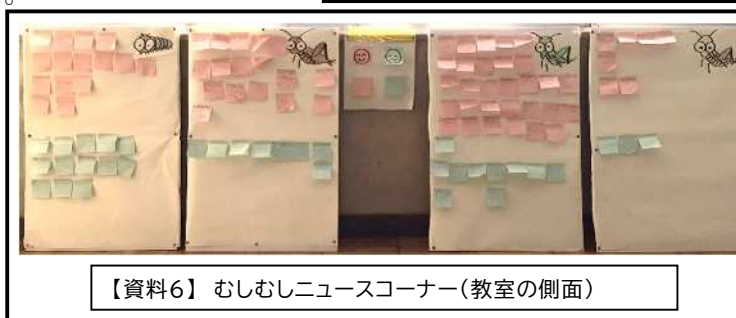
虫の様子や変化に気付くことができるように、毎日「むしむしけんこうかんさつ」をする時間を設けた。「むしむしけんこうかんさつ」では、○の中に虫の表情を描いたり、見つけたことやわかったこと、昨日と変わったことや飼育上困っていることなど日記をつけたることができる。【資料5】



【資料5】A児のむしむしけんこうかんさつ

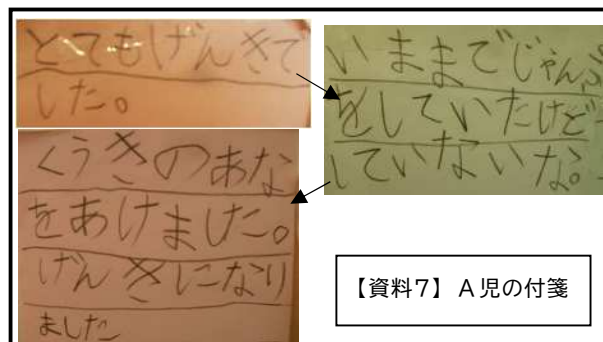
A児はバツタの体が緑色であることから「めろんちゃん」と名付けた。「よくはねました」「くさをたべてました」などと、毎日健康観察をした。

更に虫について発見したことや悩みを色別の付箋に書いて、虫ごとに「むしむしニュースコーナー」に掲示することで、それぞれの気づきを学級全体で共有した。【資料6】はじめは、発見を書くピンクの付箋が多かったが、飼育日数が増えるにつれ、悩みを書く水色の付箋が増えてきた。



【資料6】むしむしニュースコーナー(教室の側面)

A児ははじめ、「とてもげんきでした」とピンクの付箋に書いたが、その後「いままでじゃんぷをしていたけどしていないな」と水色の付箋に記した。その付箋を見て、B児が「空気穴がないよ。息ができないんじゃないかな」と言うと、すぐにペットボトルに穴を開けた。そして、ピンクの付箋に「くうきのあなをあけました。げんきになりました」と書き、付箋を貼った。【資料7】「むしむしニュースコーナー」に付箋を貼り、悩みを共有したことで友達からアドバイスをもらうことができた。



【資料7】A児の付箋

また、友達の見聞だけではなく、虫にとってよりよい飼育方法を調べられるように、参考になる図書資料を用意し、「むしむししらべコーナー」を設置した。子どもたちは、虫の生態や世話の仕方について調べ始めた。【資料8】



【資料8】本を読む A 児

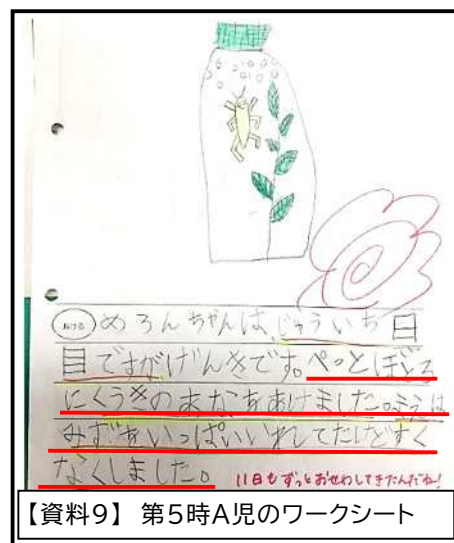
A児は、休み時間にも、自分の飼育ケースを観察したり、「むしむししらべコーナー」でショウリョウバッタについて書かれている本を読んだりした。A児は友達の見聞を聞いたり、本を読んだりすることで、めろんちゃんに寄り添った世話をしようとする姿が見られた。

### (3) どうしたら元気になるかな？

#### 〈むしむし会議 I〉 てだて1・2

世話を続けていると、元気に育てている児童がいる一方で、虫の元気がなくなったり、死んでしまったりする児童が増えてきた。互いの世話の工夫や困りごとなどを話し合う「むしむしかいぎ」の場を設けた。

A児はワークシートに「ぺっとぼとるにくうきあなをあけました。まえはみずをいっぱい入れてたけどすくなくしました」と今までしてきた世話の仕方を振り返った。【資料9】



【資料9】 第5時A児のワークシート

学級全体で、自分の虫の世話の仕方を発表した後、飼っている虫の元気がなくなってしまう子に焦点を当て、「ずっと元気で飼うためにはどうしたらいいかな」と問いかけた。「えさ、おうち、おせわ」の視点で話し合い、3つに分けて板書することで、どの虫も新鮮なえさが必要なことや、環境が整うとよいという共通点を見つけさせたいと考えた。【資料10】「むしむししらべコーナー」の本に書かれていたことを発表する児童や自分で試してよかった方法を



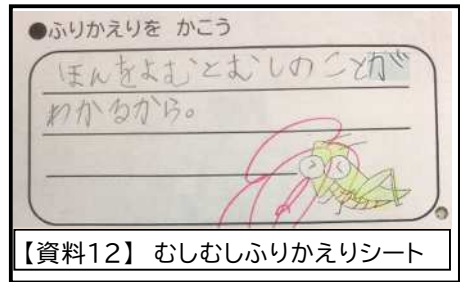
【資料10】 むしむし会議 I の板書

- T : ずっと元気であるためにはどうしたらいいかな。  
 C 1 : 毎日お世話をする  
 C 2 : ペットボトルのキャップにちょっと水を入れる  
 T : ペットボトルに水を入れた子いたよね。それは？  
 C 3 : だめ。おぼれちゃう  
 C 4 : シュッシュュッって霧吹きをする  
 T : 他にはある？  
 C 5 : 本を読む  
 C 6 : 毎日草を換えた方がいいって書いてあった  
 C 7 : 捕まえたところと同じにする  
 T : どこで捕まえたの？  
 C 8 : 運動場。枯れ葉があった  
 T : バッタは？  
 C 9 : ネコジャラシ  
 C 10 : 緑の葉っぱ。新鮮なおいしいの  
 T : 新鮮って？  
 C 11 : おいしい。採れたて新鮮  
 C 12 : ニンジンとか  
 C 13 : 本で、バッタは大きいケースがいいんだって。

【資料11】 第6時の授業記録より

発表する児童がいた。「シュッシュュッって霧吹きをする」「捕まえた所と同じにする」「緑の葉っぱ。新鮮なおいしいの」「本でバッタは大きいケースがいいんだって」などという意見が出た。【資料11】「えさ、おうち、おせわ」を改良していけば「虫がうれしい」ことがわかり「これからもお世話をがんばる」という意見に学級全体が賛同した。

A児は友達の見解をうなずきながら聞いていた。「虫が長生きできるように何をやるかな」と学級全体に問いかけたところ、A児は「ほんをよむとむしのことがわかるから」とむしむしふりかえりシートに書いた。【資料12】このことから、めろんちゃんが長生きするためのよい飼育方法を知りたいという思いがわかる。また、「むしむしかいぎ」で出た「霧吹きをする」という意見から、霧吹きをしている友達のところへ行き、自分の飼育ケースにも霧吹きをする姿があった。【資料13】A児自ら友達に関わっていく姿から、自分の虫への思いが更に深まっていることがわかる。



【資料12】 むしむしふりかえりシート

「むしむしかいぎ」の後もよりよい飼育環境にするために、A児は「おうち」を改良した。「むしむしかいぎⅠ」で新鮮な草がよいと知り、草の色が変わってくると、中庭(A児の虫がいた場所)に行き新鮮な草を取ってきて「おうち」に入れた。また、飼育をしていく中で、ペットボトルでは狭いと考え、家の人に頼んで大きめの飼育ケースを用意してもらい世話をしていた。その際、多くの友達が土を入れる中ずっと土を入れなかったA児が土を入れた。なぜ土を入れたのか聞いたところ、「卵を産むときは、土があるとよいてむしむしらベコーナーの本に書いてあったよ。飼って長いから卵を産むかもしれないから土を入れた」と話した。一匹の飼育ではあったが、本で得た知識を使い、改良したことがわかる。また毎日一回霧吹きをして、湿った土を維持した。「むしむしかいぎ」で話し合った時に知った霧吹きを、忘れずに続けていた。更に、えさとして野菜を入れている児童がいたので、その虫を観察し、野菜を食べているところを見て、「(自分も)持ってくる」と言い、家からニンジンを持ってきて入れた。【資料14】野菜の中でもニンジンを持ってきたことは、「むしむしかいぎ」で、ニンジンを食べると言った友達の意見を参考にしていることがわかる。



【資料13】 霧吹きをするA児



【資料14】 新鮮な草と土、ニンジンを  
入れ改良したA児の飼育ケース

ニンジンの上でバッタが口をもぐもぐ動かしていることを確認して、A児はうれしそうに担任に話した。友達と飼育上の悩みや変化、成長の喜びを共感したり、個々の気付きを「むしむしかいぎ」で共有したりすることで、友達の工夫を取り入れ、更に自分で改良していく様子から自分の虫(めろんちゃん)を大切にしたいという思いが、ますます深まっていることがわかる。

#### (4) むしむしランドを開こう 〈むしむし会議Ⅱ〉

てだて2

「むしむしかいぎⅠ」で飼育方法を話し合うことで、よりよい飼育ができるようになったため、虫が長生きするようになった。「虫が元気になったよ。このおうちを見てほしいな」「ぼくのバッタのジャンプを見せたいな」など、よりよい世話ができたことや元気な自慢の虫をみんなに見せたいという気持ちをもつようになった。そこで、自分の虫を紹介する場として、「むしむしランド」を開くことにした。「お家の人にも見てほしいな」という意見が出たので、授業参観でも発表することにした。虫の特徴や飼育方法の動画

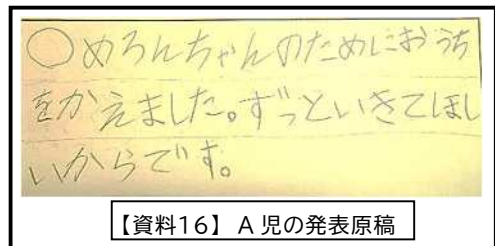


を撮って説明したり、絵を描いて世話の仕方を発表したりした。また、ペーパーサートで虫の特徴を話したり、段ボールで虫を作り、虫の生態がどうなっているのかを説明したりするなど、発表にもさまざまな工夫があり、大切に世話をしてきた虫について知りたいという姿が見られた。



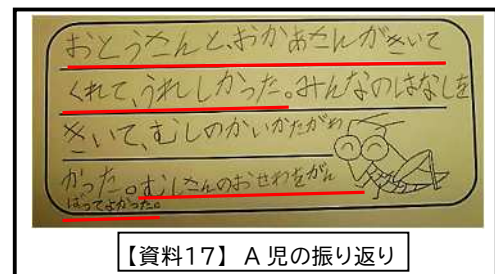
【資料15】 むしむしランドで友達と一緒に発表する A 児

A 児は、動画でバッタの世話の仕方を友達と発表した。【資料15】「めろんちゃんのためにおうちをかえました。ずっといきてほしいからです」と話した。【資料16】振り返りには「おとうさんとおかあさんがきいてくれて、うれしかった。(中略) むしさんのおせわをがんばってよかった」と世話をがんばった自分に気付くことができた。【資料17】



【資料16】 A 児の発表原稿

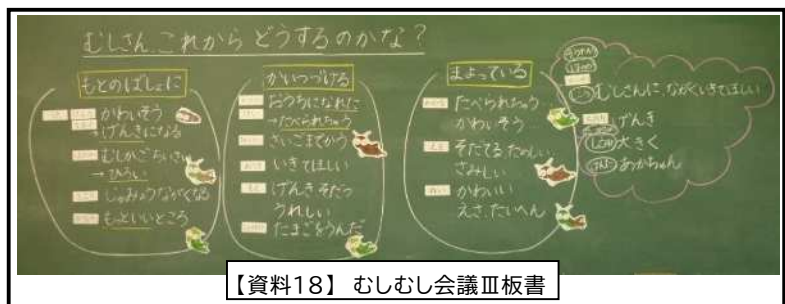
家の人に褒めてもらった児童は、もっと虫のことを知ってほしいという思いが高まり、「ふだん遊んでくれる6年生を招待したい」と提案した。そこで、6年生にも「むしむしランド」を開くことにした。虫に寄り添い、継続して世話をしたことで、自分の虫について自信をもって発表できた児童の姿がたくさん見られた。



【資料17】 A 児の振り返り

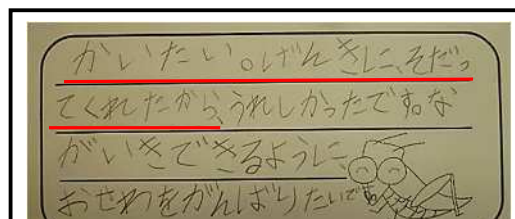
(5) わたしの虫、これからどうするのかな? 〈むしむし会議Ⅲ〉 **てだて2**

1 か月程、虫の飼育をしてきた。途中、虫の元気がなくなり悲しい思いをした児童も少なくないが、「むしむしかいぎ」で友達と意見交換をする中で、虫が長生きできるような飼育の仕方を考え、虫のおうちを改良してきた。しかし、10月下旬になるとだんだんと虫がいなくなってしまうことや、飼育しているが元気がなくなってきたことから虫を元の場所に戻してあげたいという考えをもつ児童が出てきた。そこで、「むしむしかいぎⅢ」を開き、今後虫をどうするかを学級で話し合った。このまま飼い続けるという児童からは、「元気に育ってくれてうれしいから」「最後まで責任をもって飼いたい」「他の虫に食べられてしまうのがかわいそう」「卵を産んだから飼いたい」などの意見が出た。一方で、元の場所に戻したいという児童からは、「元に戻した方が元気になる」「狭い虫かごより草むらの方が広い」「寿命が短くなってしまう」などの意見が出た。また迷っている児童は「育てることが楽しいけど、元の場所に戻した方が虫にとっていいのかな」という意見が出て、虫のためにどうしたらよいかを考えることができ、どの児童も「虫が元気に長生きしてほしい」という同じ思いをもっていることがわかった。【資料18】

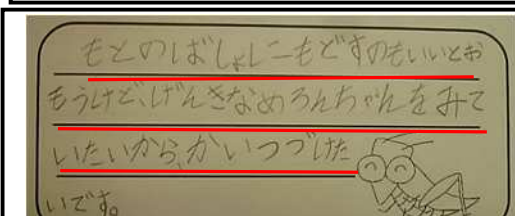


【資料18】 むしむし会議Ⅲ板書

A児は会議前「かいたい。げんきにそだってくれたから」とワークシートに記した。【資料19】会議に参加し友達の意見を聞く中で、「もとのばしょにもどすのもいいとおもうけど、げんきなめろんちゃんをみていたいから、かいつづけたいです」と記した。【資料20】会議後も、毎日霧吹きをしたり、新鮮な草を入れたりして世話を続ける姿が見られた。このことから、A児は、虫もっと仲よくしたい、よりよい世話をして生き物を大切にしたいという思いをもったことがわかった。



【資料19】 むしむし会議前の A 児のワークシート



【資料20】 むしむし会議後の A 児のワークシート

### 3 成果と課題

#### (1) 成果

一人一人が責任をもって世話ができるように「一人一ケース」で飼育をし、毎日「むしむしけんこうかんさつ」を行い、自分の「虫」の様子を記録する場を設定することで、虫と対話し、虫の特徴や変化を感じながらよりよい世話の仕方考えることができた。「むしむししらベコーナー」を用意したことで、もっと虫のことを知りたい、世話の仕方を知りたいと思えるようになった。虫の表情が書きこめる「むしむしふりかえりシート」を使用したことで、虫の気持ちに寄り添って世話の仕方考えることができた。

「むしむしニュースコーナー」を設けることで、自分の虫の様子を知らせたり、困っていたりすることを共有し、友達とアドバイスをし合うことでよりよい世話をすることができた。

クラス全体で話し合える場「むしむしかいぎ」を設定することで、友達と飼育上の悩みや変化、成長の喜びを共感し、友達の工夫を取り入れ、大切に世話をすることができた。

A児は、友達と関わることで、バッタにとってのよりよい世話の仕方考え、次第に虫を大切に思う気持ちが高まった。虫のことを思って、よりよい飼育環境を整えたり世話をしたりできるようになった。

#### (2) 課題

単元終了後も、子どもたちは、飼育ケースで最後まで虫を世話したり、元の場所に戻したりする姿が見られた。今回の虫の飼育活動を通して、虫と対話する場や友達と関わる場を設定したことで、虫と仲よくしたいという願いをもち、よりよい世話の仕方に気付き、生き物を大切にしたいという思いが育った。今後、他の生き物(小動物など)にも愛着をもってその命を感じ、大切にしたいという思いを強くできるような単元開発を進めていきたい。

#### (3) 研究主題に向けて

友達と関わる中で、友達のよさを取り入れ、よりよくしようという思いをもち、学び続ける姿が見られた。見つけた新しい価値を今後の生活の中で生かして行ってほしい。

年長児との交流を通して、人と関わることのよさや自分の成長を感じる子の育成  
—1年生活科「おいでん わたしたちの みずまつり」の実践を通して—

西尾市立一色東部小学校 高橋 浩司

## 1 単元について

### (1) 単元設定の理由

本学級の児童は、遊びへの興味関心が高い。通学路探検では、保育園に関心をもち、遊びに行きたいという思いをもった。年長児やお世話になった保育士と関わる機会を設けると、もっと年長児と遊びたいという思いを高めた。

そこで、本単元「おいでん わたしたちの みずまつり」を構想した。隣接する一色東部保育園の年長児との交流を軸に、「年長児に喜んでもらいたい」という願いの実現に向けて活動を進めた。友達と関わりながら、年長児の立場で準備に取り組み、招待した年長児らが喜ぶ姿を見たり、周囲の人から認められる場を設けたりすることで、人と関わることのよさを感じることができると考えた。また、互いの活動を認め合ったり、活動の振り返りを累積し、自分の変容をメタ認知したりすることで、年長児のために活動できた自分や友達のよさに気づき、自分の成長を実感することができると考えた。さらに、本学級の児童と年長児の双方にとって有益な交流活動にもなることを願った。

研究テーマを「年長児との交流を通して、人と関わることのよさや自分の成長を感じる子の育成」と設定し、実践に取り組んだ。

### (2) めざす子どもの姿

- ・人と関わることのよさを感じる子や自分の成長を感じる子

### (3) 研究の仮説と手立て

めざす子どもの姿に迫るために、研究の仮説とその手立てを次のように考えた。

【仮説1】子どもの思いや願いをもとにグループを編成し、年長児や保育士、友達と関わり、伝え合う場を設ければ、人と関わるよさを感じることができるだろう。

【手立て1】年長児に喜んでもらうことを目的に、グループで「みずまつり」の準備を進めることにより、友達とともに思考し、協働しながら思いや願いを実現できるようにする。

【手立て2】交流活動後、年長児や保育士から感想をもらったり、単元の最後に、「ほめほめ大会」を開き、自分や友達の活動を振り返ったり、伝え合ったりすることにより、満足感や達成感を味わうことができるようにする。

【仮説2】年長児を招待するための準備や交流の場面において、互いの活動のよさを認め合ったり、心の変容をメタ認知できるようにしたりすれば、自分の成長を感じることができるだろう。

【手立て3】活動や発表に対する思いや願いを可視化できる「鯛シール」を貼ることを通して、互いの活動のよさを認め合い、自信をもてるようにする。

【手立て4】ポートフォリオ型ワークシートを用いて、その日の自分の様子を表情（えがおメーター）で表して振り返り、その累積により、自分の成長を感じることができる。

(4) 抽出児童Aにかかる願い

児童Aは、生活科の学習において意欲が高い。日常生活では自信がなく、積極的に友達と関わるのが苦手だった。2学期の始業式でスピーチをしたことにより、自信をもち始めている。児童Aに対し、次のように願いをかけた。

○「みずまつり」を開くという目的に向かってグループで活動することにより、友達との関わりを深め、友達と協力して活動することのよさを感じてほしい。

○年長児のことを考えて「みずまつり」の準備を進めることにより、年長児の立場になって遊びや作り方を工夫し、やり遂げた自分や友達のよさに気付いてほしい。

(5) 単元構想と手立ての位置付け

手立てを踏まえ、以下のように単元構想を立て、実践に取り組んだ(資料1)。

資料1 単元構想「おいでん わたしたちの みずまつり」(14時間完了)							
	学習課題 (丸数字は授業時数)						
出会う	(入口) 園庭で年長児と一緒に遊んだ体験を通して、年長児と もっと関わりたいという思いをもっている。 年長児に喜んでもらうために、自分たちができることを考えよう①						
追究・探究する	年長さんを迎える準備をしよう④ ※手立て1 お店ごとに準備をして、年長さんに喜んでもらうにはどうしたらよいか考えよう⑥ ※手立て1、手立て3、手立て4 <table border="1" style="margin: 10px auto; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <tr> <td style="padding: 2px 10px;">&lt;しゃぼん玉屋さん&gt;</td> <td style="padding: 2px 10px;">&lt;泥団子屋さん&gt;</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px 10px;">&lt;色水屋さん&gt;</td> <td style="padding: 2px 10px;">&lt;魚すくい屋さん&gt;</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px 10px;">&lt;水鉄砲屋さん&gt;</td> <td style="padding: 2px 10px;">&lt;水中めがね屋さん&gt;</td> </tr> </table> 年長さんを招待しよう② ※手立て2	<しゃぼん玉屋さん>	<泥団子屋さん>	<色水屋さん>	<魚すくい屋さん>	<水鉄砲屋さん>	<水中めがね屋さん>
<しゃぼん玉屋さん>	<泥団子屋さん>						
<色水屋さん>	<魚すくい屋さん>						
<水鉄砲屋さん>	<水中めがね屋さん>						
振り返る	ほめほめ大会をして、学習を振り返ろう① ※手立て2、手立て4 (出口) 年長児を招待し、水遊びをする活動を通して、人と関わる こと の よ さ や 自 分 の 成 長 を 感 じ る こ と が 可 能 だ。						

- ※手立て1  
・グループで「みずまつり」の準備を進める。
- ※手立て2  
・年長児や保育士から感想をもらったり、「ほめほめ大会」を開いたりする。
- ※手立て3  
・思いや願いを可視化できる「鯛シール」を貼り、互いの活動を認め合う。
- ※手立て4  
・自分の様子を表情(えがおメーター)で表して振り返る。

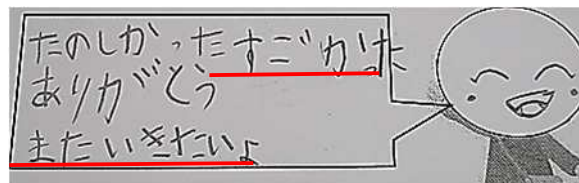
2 実践経過と考察

(1) 年長児に喜んでもらうために、自分たちができることを考えよう(単元を貫く課題の設定)

保育園の園庭で遊んだ翌日、1年生と年長児が笑顔で一緒に遊んでいる写真を見せると、「一緒にかげっこできてよかった。」「年長さんが喜んでいた。」と発言した。児童Aも「年長さんと遊べてうれしい。」と発言した。年長児への意識が芽生えた様子から、「これからしたいことはありますか。」と問いかけた。すると、「今度は年長さんに来てもらいたい。」と答えた。さらに、「招待して何をしたいですか。」と問うと、ある児童が「この前、お祭りに行ってきたんだけど、すごく楽しかったから、みんなで屋台をやりたい。」と発言した。すると、「私もやりたい。」「お祭り楽しそう。」と他児も賛同した。「どのようなお店を開きたいですか。」と問うと、多くの児童が、生活科で行った水遊びをやりたいと言い、全員が賛同した。こうして、年長児にもっと喜んでもらえるように、様々な水を使った遊びのお店を開き、「みずまつり」を開くことに決まった。

## (2) 年長さんを迎える準備をしよう (願いや思いの醸成)

年長児への思いをさらに高められるように、年長児がどのような様子になったら成功かということ話し合う場を設けた。すると「年長さんがとびきりの笑顔になったらいい」ということに決まった。そこで、「とびきりの笑顔」をイメージできるように、表情(以下「えがおメーター」)や年長児に言ってもらいたいコメントを記すことができるワークシートを用意した。すると、児童Aは、自分なりのとびきりの笑顔と、「すごかった。」「またいきたいよ。」など、言ってもらいたいコメントを記した(資料2)。



資料2 児童Aの年長児「えがおメーター」とコメント

次に、何の遊びをする店を開くかを定めるために、前単元で行った6つの水遊び(しゃぼん玉・泥団子・色水・魚すくい・水鉄砲・水中めがね)を迫体験する場を設けた。また、グループ決めは、児童の思いを大切にするために、人数制限を設けなかった。

児童Aはしゃぼん玉と泥団子で迷っていたが、「しゃぼん玉より泥団子の方が楽しいから泥団子にする。年長さんにも楽しんでほしいから。」と、泥団子屋さんに決めた。店長を決める話し合いでは、児童Bに譲る様子が見られた。まだまだ積極的になれず、自分の思いを我慢してしまう面があると感じた。

## (3) 開店の準備をして、年長さんに喜んでもらうにはどうしたらよいか考えよう

### ア 年長児の立場に立って友達と協働して準備をしよう (手立て1の検証)

準備が始まり、それぞれのお店から「水風船がたくさんほしい」「色水を入れるコップがほしい」などの要望の声が上がったが、以前の作り方にとどまり、相手を意識した工夫は見られなかった。また、児童Aの泥団子屋さんは「つるつるにしたい」という思いをもって活動していたが、同じような泥団子がいくつもできて、「いっぱいできた」と満足していた。それは年長児が園で作るものとあまり変わらない出来栄であった。こうした現状を変えるために、年長児が行ったという水遊びや、縁日ごっことうまく接続できないかと考えた。

そこで、保育士へのインタビューを提案した。「下校後に、保育園へインタビューに行きたい人はいますか。」と聞くと、児童Aを含め数人の児童が手を挙げた。児童Aは、児童Eと水遊びのインタビューをすることになり、友達と練習を繰り返した。

2名の年長児の担任に、児童たちがお店をレベルアップできるような受け答えをしてほしいと事前に依頼しておいた。児童Aの元担任だったH先生には水遊びについて、I先生には縁日ごっこについて話してもらおうこととした。当日、児童たちは喜んでインタビューに出かけた。インタビュー後、H先生から「Aちゃん、頑張ってるね。年長さん、『みずまつり』を楽しみにしているからね。」と励まされると、「うん、頑張る。」と前向きな気持ちになり、活動への意欲を高めたようであった。「H先生とまた話せてよかった。」とつぶやくA児の姿もあり、お世話になった人と再び関わることのよさを感じていた様子も伺えた。

次の日、教室でインタビューの様子を動画で見せた(資料3)。児童たちは、「協力して」というI先生の言葉を受け、「私たちもお店のみんなと協力してやろう」と、協働への意欲を高めた。また、「年長さんがやったことのない遊びがいいな。」というH先生の言葉を受け、年長児が経験している4つの水遊び(しゃぼん玉・泥団子・色水・水鉄砲)をもっと工夫し、驚かせたいという気持ちをもった。

児童E: 保育園ではどんな水遊びをしましたか。  
 H先生: しゃぼん玉と泥団子と色水と水鉄砲です。  
 児童E: やってほしい水遊びは何ですか。  
 H先生: 年長さんがやったことのない遊びがいいな。  
 児童F: 年長さんががんばったことは何ですか。  
 I先生: 協力して商品やお店の看板を作りました。

資料3 保育者へのインタビュー (9/26)

他の児童も、年長児の行った水遊びの様子を詳しく知りたい様子であったため、年長児の水遊びの写真を提示した。すると、しゃぼん玉屋さんの児童Fは「しゃぼん玉はストローで吹いているから、他の道具を使ったほうがいいね。」と道具に着目した。水鉄砲屋さんの児童Jは「的が当たりやすそうなどころにあるから、的の場所を変えるといいかも。」と遊び方に着目した。しかし、児童Aは年長児の泥団子の写真を見て、「私たちが作るものとほとんど変わらないから喜んでくれないよ。」と気づき、「どうしよう。」と悩み始めた。色水屋さんの児童も同様であった。




そこで、児童らの悩みを解消するために、水遊びの本を図書館から借り、教室に、「みずまつりヒントコーナー」を設置した。児童Aは、すぐに興味をもち、泥団子の遊び方が載っている本を熱心に読んだ。そして、「この『宝石泥団子』(色を塗った泥団子)をやってみたいけれど、1人じゃ難しそう。」と本を見せながら、担任に話してきた。「1人でやるのではなくて、4人で協力したらどうかな。」と助言すると、「そうだね。みんなでやればできるかも。」と言い、児童Bと児童Cに「これやってみない。」と「宝石泥団子」のページを見せた。すると、児童Bが「まず、つるつるのをいっぱい作ってから色を塗るといいんじゃない。」と言い、「そうだね。みんなで協力して、まずつるつるの泥団子を作ろう。」と児童Aは答えた。

同じ目的に向かうグループで準備を進めることにより、友達とお店のパワーアップに向けての方向性が決まり、思いや願いの実現に向け協働して行っていこうと動き出すことができたと考える。

**イ 活動を認め合いながら、パワーアップしていこう (手立て1、手立て3の検証)**

「みずまつり」の準備を進める上で、毎時間の自分の活動を「えがおメーター」で表し、どうしてその顔になったかを記して、振り返りを累積し、変容や成長を、客観的に捉えることができるようにした。

準備を始めた頃は、笑顔をかき児童は少なかったが、準備を進めるにつれ、笑顔をかき児童が増えていった。児童Aも最初の2回は悲しい表情をかき、「けんかした。」「作った

	けんかしててからけんかした。 つぎはうれしくしたい。
	つぎはにこまかくしたい。 とびちがくすのいこわしからけんかした。
	けんかしててけんかした。 つぎににこまかくしたい。 つるつるにできたいからした。 たのしかった。 またやしたいとおもった。

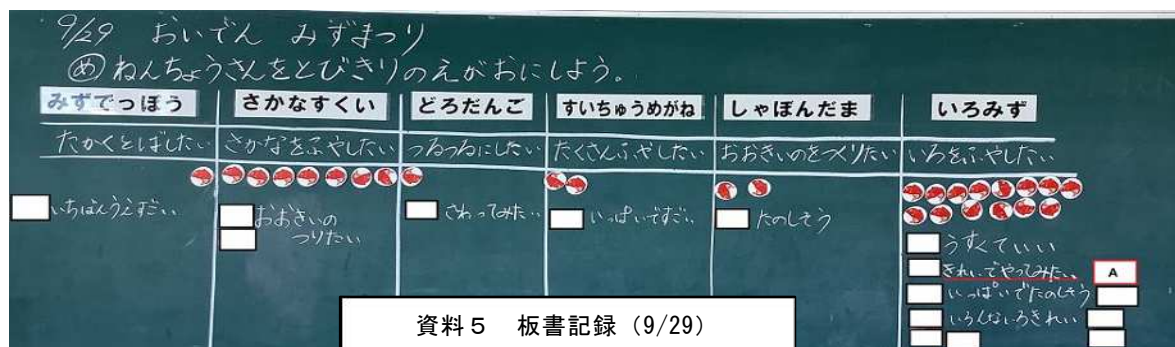
資料4 児童Aのワークシート (9/19・26・29)

のに壊した。」と記述していた。しかし、保育士のインタビューによって、協力して行おうという気持ちを高めた後の3回目の準備では、微笑みに変わり、「つるつるにできたのしかった。」「またやりたい。」と変容が見られた(資料4)。「今日は悲しい顔じゃないね。」と話しかけると、前回までのものと見比べて、「うん、初めて協力してやれたから。」と答えた。自分の様子を表情で表し、累積したことで俯瞰的に活動を振り返ることができ、その違いに気付くことができたと考えられる。

しかし、児童Aがめざしているとびきりの笑顔ではなかったことを問うと、「うん、だって『鯛シール』を全然貼ってもらえなかったから。」と答えた。他のお店の友達から認めてもらえなかったことに、満足感を得ていない気持ちが伝わってきた。

「鯛シール」とは、友達の活動や発表を認め、自分もやってみたいという思いを他者に伝えることができるものである。伝えることが苦手な児童も、友達のよさを伝えることができる利点がある。入学当初から活用しており、この单元でも取り入れていた。

毎時間、それぞれのお店の活動の願いを板書で示しておき、活動後、その成果を写真や動画、実物で披露した。そして、自分が年長児だったらどのお店に1番行きたいかを「鯛シール」で表し、その理由を発表する流れとした。1回目・2回目の準備(9/19、26)では、どのお店も同じぐらいの「鯛シール」が貼られていたが、3回目の準備(9/29)では色水屋さんに「鯛シール」の多くが集まった。色水屋さんは2回目まではなかなかうまく色水を作ることができていなかったが、「みずまつりヒントコーナー」で見つけた本の内容を参考に、たくさんの種類の色水を3回目で作った。それを見た児童たちは、「いろいろな色できれい。」などと言って「鯛シール」を貼った。児童Aも「Eさんと同じで、きれいだからやってみたい。」と自分の言葉を添えて色水屋さんのよさを認めることができた(資料5)。



児童Aは、「鯛シール」をいっぱい貼ってもらいたいという思いをもち、「宝石泥団子」の制作に取り組んでいた。「宝石泥団子」はつるつるの泥団子に絵の具で色を着けていくものだが、つるつるの泥団子がまだ少ないからと、児童B・Cと3人で休み時間も熱心に泥団子を作っていた。3人に、休み時間に遊ばなくてもよいのかと尋ねると、「うん。だって年長さん全員に渡したいからいっぱい作らなきゃ。」と年長児のことを考えた言葉が返ってきた。一方児童Dは、「休み時間は遊びたいからやらない。」と言って制作に加わらなかった。しかし、泥団子屋さんの3人が休み時間も制作していることを学級全体に広め

ると、水中めがね屋さんの児童たちが「私たちも年長さんの人数分できてないから休み時間に作ろう。」と制作を始めた。児童Dはこうした姿に感化され、放課に泥団子を一緒に制作するようになった。児童Aに「4人そろったね。」と言うと、「うん、うれしい。お店のみんなでやりたかったから。」と笑顔で答えた。

4回目の準備では、泥団子屋さんは「宝石みたいにしたい」という願いのもと「宝石泥団子」の制作に取りかかった。児童Aは、児童Dに「水をたくさんつける方が宝石にきれいに色が着くよ。」と助言した。児童Dは、「ほんとだ。」と聞き入れ、協働的に取り組む姿が見られた。4人がそろったことを喜ぶ姿や、自信のなかった児童Aが、自ら児童Dに関わる様子から、思いや願いを実現するために、グループで思考して「みずまつり」の準備を進めたことは、協働のよさを感じるために有効であったと考える。

活動を終え、それぞれのお店が学級全体に活動の成果を披露した。泥団子屋さんは、制作した「宝石泥団子」の実物を見せた。その後で、「鯛シール」を貼り合った。

前回同様に、色水屋さんに「鯛シール」が1番多く貼られたが、泥団子屋さんも同じくらい多くの「鯛シール」が貼られた（資料6）。

それを見て、泥団子屋さんの児童たちは満面の笑みを浮かべた。また、資料5と資料6を比べると、明らかに泥団子屋さんの「鯛シール」の数が増えていた。思いや願いを可視化できる

「鯛シール」を取り入れたことにより、周囲の人から認めてもらえたことの実感と、自信につながったと考えられる。児童Aは「えがおメーター」にはじめて笑顔をかき、「模様の泥団子を作れて楽しかった。」（資料7）と記述した。こうした様子から、「鯛シール」は、互いの活動を認め合い、自信をもてるようにするために、有効であったと考える。

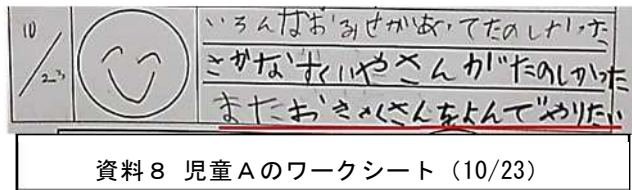
#### （4）年長さんを招待しよう（手立て2の検証）

準備を終えたので、年長児に合った遊びや作り方になっているかを学級全体で確かめ合うために、1年生役（お店）と年長児役（お客さん）に分かれて「お試し会」を開いた。

年長児役の子Aは、魚すくい屋さんで「年長さんにはポイは難しいけど、手ならすくえる。」とつぶやいた。また、1年生役になると、「いらっしやいませ。」と大きな声で呼び込んだ。「泥団子の種類がいろいろあるから、年長さんは選ぶのが楽しいと思う。」と友達に言ってもらい、うれしそうであった。しかし、泥団子を取るときにひっかかって、泥



団子が欠けてしまうことがあった。  
「年長さんに選んでもらった後、袋に入れるのは1年生がやった方がいい。」とお客さん役の友達から助言を受けた。児童Aたちは、すぐに改善した。その日の



資料8 児童Aのワークシート (10/23)

「えがおメーター」には笑顔をかき、「またお客さんを呼びたい。」と記述した(資料8)。

招待当日は、和気あいあいとした雰囲気、笑顔があふれていた。児童たちが年長児に寄り添い、優しく声をかける姿が随所で見られた。児童Aは、年長児や保育士におすすめの泥団子を紹介したり、泥団子を丁寧に袋に入れたりして、うれしそうに年長児や保育士と接していた(写真1)。

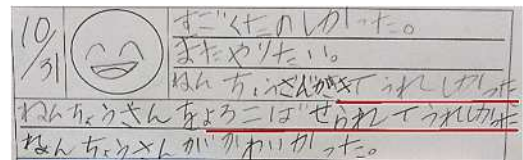


写真1 年長児や保育者と接する児童A (右手前)

年長児たちも、「すくえてよかった。」「もっと水をかけたい。」「もらったもの大切にするね。」

などと感想を言いながら、楽しんでいた。「みずまつり」が終わると、H先生から感想が届いた。H先生には、児童たちの成長の評価を依頼しておいたため、児童たちが年中児や年長児の時と比較してできるようになったことを大いに褒めてもらい、さらに「年長さんは小学校がとても楽しみになりました。また1年生と一緒に活動したいです。」と言ってもらえた。児童たちは、H先生の感想を真剣に聞き、涙ぐむ姿も見られた。年長児や保育士の感想から、今回の「みずまつり」は小学校側だけでなく、園児にとってもよい交流ができたと考えられる。

振り返りの前に、年長児の笑顔の写真を提示し、感想を紹介した。児童Aは「とびきりの笑顔になってもらえたし、H先生に褒められてよかった。」と満足感を感じさせる言葉をつぶやいた。そして、



資料9 児童Aのワークシート (10/31)

「えがおメーター」に、お試し会のときよりもパワーアップした笑顔をかき、「年長さんを喜ばせられてうれしかった。」と記述した(資料9)。

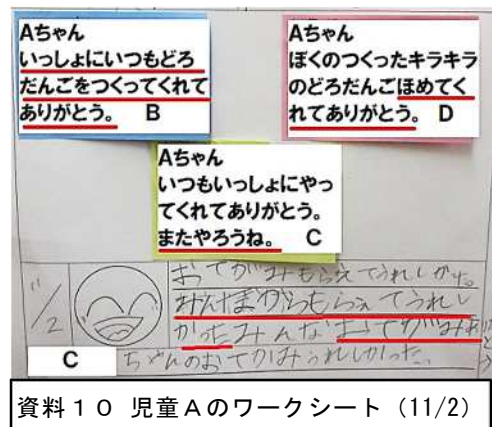
年長児や保育士から感想をもらったことは、満足感や達成感を味わうために有効であったと考える。

#### (5)「ほめほめ大会」をして、学習を振り返ろう(手立て2、手立て4の検証)

児童たちは準備段階で、他のお店の活動を認め、褒め合っていた。しかし、自分のお店の友達を認め合うことはまだ不十分であった。そこで、「みずまつり」の2日後、「ほめほめ大会」と称し、同じお店の友達のよさを伝え合う場を設けた。まず、お店の活動の様子を、準備段階から写真で振り返った。そして、同じお店の友達への思いを付箋に書いて交換し合った。

もらった付箋を読んだ児童たちは「えがおメーター」をかき、「うれしい。」「ありがとう。」「うれしいそうにつぶやき、教室全体が温かい雰囲気になった。児童Aは、「教えてく

れてありがとう。」「最後まで片付けしてくれてありがとう。」「友達への感謝を記した。そして、友達からもらった「いつも一緒に泥団子を作ってくれてありがとう。」「褒めてくれてありがとう。」「またやろうね。」など書かれた付箋を読み、「えがおメーター」にとびきりの笑顔をかき、「みんなからもらえてうれしかった。」「お手紙ありがとう。」と記述した（資料10）。教師が「これまでの笑顔と違うね。」と声をかけると、今までの「えがおメーター」と見比べて、「だってすごくうれし



いんだもん。やってよかった。また友達と協力して年長さんを喜ばせたい。」と答えた。

「えがおメーター」の笑顔が、これまでで一番のとびきりの笑顔であったことから、友達に認められ、満足感と達成感が高まった様子が伺える。「ほめほめ大会」は、有効であったと考える。

また、こうした変容は、累積してきた「えがおメーター」を見たことにより表出したものとする。よって、ポートフォリオ型ワークシートを用いたことは、自分の変容を客観的に見ることができ、自分の成長を感じさせるために有効であったと考える。

### 3 成果と課題

#### (1) 成果

「年長さんをとびきりの笑顔にしたい。」という児童の思いや願いを大切に、年長児の立場に立って交流活動を展開した。児童は主体的になって活動し、年長児や保育士との交流、友達との交流を経て、めざす子供の姿に近づいたことを実感している。「年長さんは小学校がとても楽しみになりました。」という保育士の言葉から、年長児にとっても、有益な交流となったといえる。今後も、児童の身近な人々との交流活動を、意図的に設定し、生活科でめざすべき資質能力の育成を図ってしていきたい。

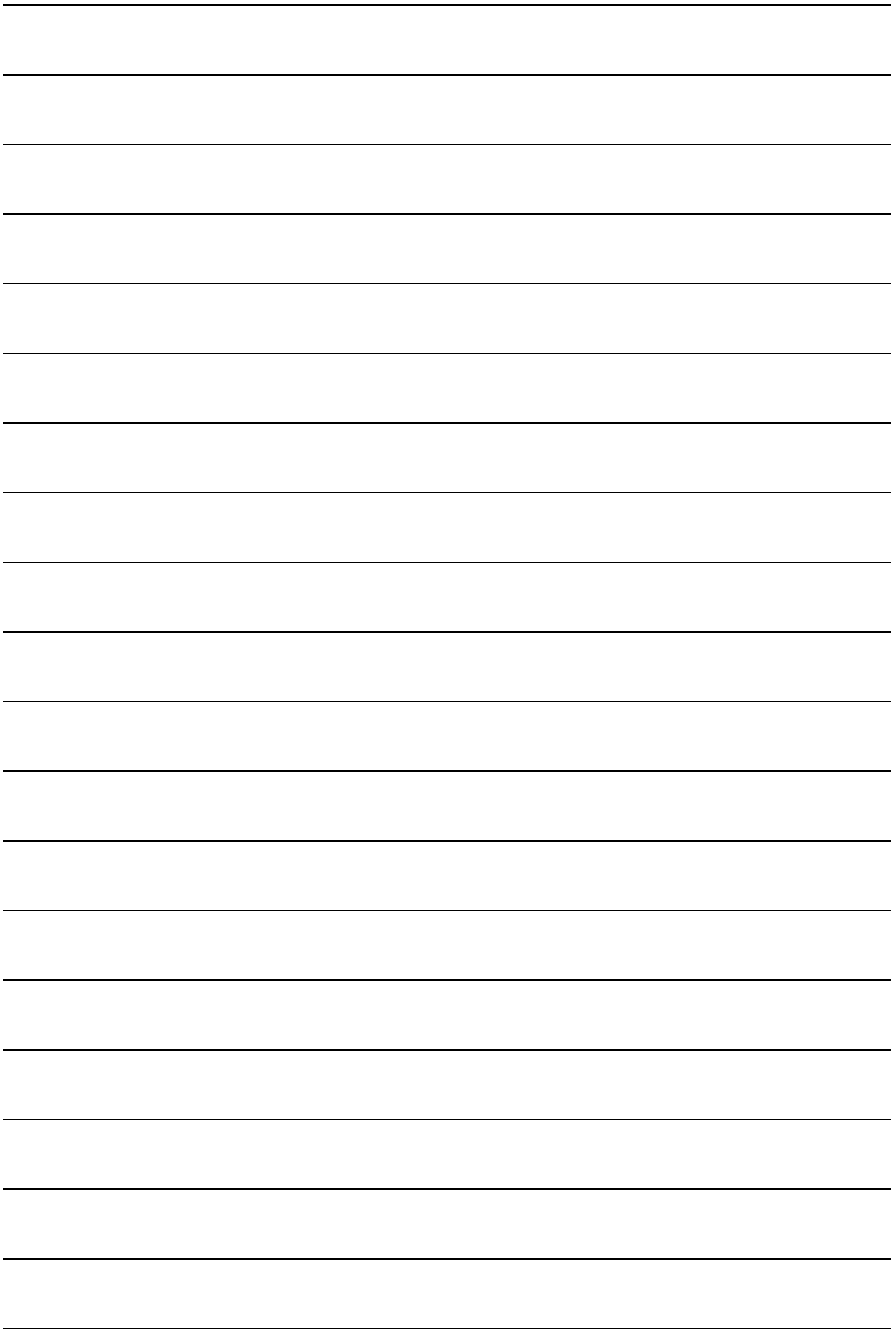
#### (2) 課題

ポートフォリオ型ワークシートを累積し、客観的に自分の成長を感じることができるようにした。「えがおメーター」の笑顔は着実に変容していったため、満足感や達成感を伺い知ることができた。児童Aが、自らの成長を感じることができるようはたらきかけをすることで、この手立ての有効性を、さらに確かなものにできたと考える。

#### (3) 研究主題に向けて

人と関わることのよさを理解して協働したり、自分の成長を客観的に捉えて今後にかかそうとしたりする力は、将来にわたって自分を支える糧となると考える。本研究を通して、こうした力を、新たな価値として培うことができたことと確信している。学校生活の中で発揮する場を設けながら定着を図り、発達段階に伴う形で、さらに培うことができるように研究を継続していく。





## 三教研生活科部会夏季研修会 アンケート

部会・委員会名（ 生活科部会 ）

期 日 令和6年8月1日（木）

会 場 へきしんギャラクシープラザ

○今後の研修事業改善に活用しますので、下のQRコードを読み取っていただき、アンケートにご協力ください。

三教研生活科部会夏季研修会アンケート

